

2020年代を照らす 1980年代東南アジア研究センターの作品  
物故者編：高谷好一、桜井由躬雄、土屋健治の尖鋭性

大橋厚子 編著

GCR Working Paper Series No. 8

March 2025



Global Collaborative Research



GCR Working Paper Series No.8

2020年代を照らす 1980年代東南アジア  
研究センターの作品 物故者編：  
高谷好一、桜井由躬雄、土屋健治の尖鋭性

大橋厚子 編著

Global Collaborative Research



---

---

## 目 次

はじめに	1
第1章 東南アジアで見出した生態で旧世界を区切った 高谷好一の2020年代における今日性： 身体を通じた日常の言葉で現象を捉え未来を語り続けて	3
第2章 桜井由躬雄の前近代東南アジア国家論が照らす 2020年代インドネシアの動向： 一次産品の海外需要・物流ルートから見た政治統合	11
第3章 没後30周年、2020年代における土屋健治作品の先端性： 感情史とブリック・ヒストリーの観点から	21

---

---



---

---

## はじめに

---

---

本ペーパーが取り上げる高谷好一、桜井由躬雄、そして土屋健治の3名は、かつて東南アジア研究センター（現東南アジア地域研究研究所）教員であり、1980年代を中心に成果を発信し、西欧社会に由来する用語の使用および学問の制度化に抗い続けた。それは1980年代の「センター」の特色でもあった。3名は東南アジアに魅了され一生を捧げたが、三者三様に自らの学問が世に受け入れられない思いを残して世を去った。

本ペーパーの目的は、20世紀後半と言う時代の制約を受けながらも、それを乗り越えようとする彼らの奮闘、より具体的には地域の総合性の希求、独自の用語使用法の追求、そして彼らの奮闘の姿勢を示して何が21世紀に通じる先見性を生んだのかを追求してみたい。筆者は人文学を専門とする。本ペーパーは「作家〇〇とその時代背景」と言った評論的エッセイとお考えいただければ幸いである。使用した主な史資料は彼らの著書のほか彼らや同僚の書いたエッセイ・発言であり、また筆者および知人の当時の記憶を参考として3人の内面に寄り添うように努めた。

以下、彼らの知的活動の前提として東南アジア研究センター創設から1980年代終わりに至る研究環境・時代状況を略述する。

1963年に設立された東南アジア研究センターは、当初から研究機関としての存在意義を問われ続けた。桜井は次のように書く。

センターはその初期に、アメリカのフォード財団の援助を受け、海外の研究事情研究や留学生の派遣を行った。1964年にはアメリカのベトナム関与が本格化し、1965年9月には9.30事件が起こって、インドネシアは一挙にスカルノ反米体制からスハルト親米体制に衣替えした。時代がきな臭い。フォードからの資金供与は当然にも既存のアジア研究者たちの怒りを買って、反センター運動が京大を中心に盛り上がった（桜井 2013:46）。

この反センター運動に対して石井は次のように率

直に書いている。

1963年学内のあらゆる反対を押し切り学内措置として東南アジア研究センター設立。65年官制化。官制化されて以後も、学内外のセンター攻撃はやまなかった。むしろ激化の一途をたどった。学生との団交に明け暮れる激動の日々は、1975年、ベトナム戦争が終了するまで丸10年にわたって延々と続いた。（中略）

こうした内外からの政治的攻撃に対する対応策は、研究業績を上げることに尽きると考えたセンターは、publish or perish（出版か死か）を旗印に、絶えることなく業績を出し続けていった。

辛く不愉快な日々がとどまることなく続く日々であった。タイ語を学ぶのはスパイ活動のためだろうとか、水田土壌を研究するのは戦車の走行の可能性の調査だろうとか、あるいはらい病の研究は細菌戦の準備のためではないか等々、思い起こしても馬鹿げた中傷に耐えながら、いかなる反対にもめげず、関係者全員が結束して、ひたすら研究を続けてきたことは正しかったと今でも信じている。むしろ、四六時中、自分自身の存在意義を問われ続け、その結果、所員全員の間に緊張感がみなぎっていたことが、かえって研究の質を高める効果をもたらしたのかもしれない（石井 2003:135-136）。

当時、関西にはアカデミズムとしての東南アジア研究は存在せず、研究方法も無ければ、論文のモデルもなかった。センターの研究者たちは新しく未だ定まらない、学問とすらわからない未知の領域へ乗り出した。多くの者が東南アジア地域研究とはフィールド調査を基礎とした学際共同研究によって事実の集積から大きな枠組みを掴みだすことと理解していた（桜井 2013:47）。桜井は書く。

毎日、毎晩、古びた一階の狭く、汚い食堂で、ディシプリンごとの地域理解についての、激論が戦われた。経済学はアンコールワットをこう考え、農学はアユタヤをこう分析し、歴史学は

現在の東南アジアをこう総括する（桜井 2013:52）。

その後、研究の蓄積が順調に積み上げられていき、東南アジア研究センターの研究の第一のピークと言える 1980 年代には、西欧近代とは別の、東南アジアの固有の地域像が追及された。東南アジアの地域像が描けているかどうかを軸に、成果・作品の質が議論された。同時に日本の人々に東南アジアを知ってもらう、東南アジアから得た知見は日本の未来に生かすべきものとされた。しかし彼ら 3 人の「研究」は一般に言われるアカデミズムの枠からはみ出していた。土屋、高谷の専門分野はかなり違うが、第一章と第三章で述べるように、作品を作る方法は意外に似ている。そして二人とも主観、独断が過ぎるとの批判を浴びた。桜井はこの二人の主観と独断を批判したが、本ペーパーで取り上げる桜井の東南アジア史概説もまた同様に歴史研究者から批判された。

彼らの背後には現状への抵抗があったと言える。マルクス主義も含めて、西欧社会を由来とする枠組・用語が外から東南アジア（および日本の）社会・国家に押し付けられる。日本でも東南アジアでも、その枠組・用語に合わない部分は遅れ、非合理とみなされた。20 世紀後半、それがいかに強かったか。近代主義でも日本発のアジア主義でもなく、東南アジアの国家と社会を説明する言葉だけでその間をすり抜けていくことは孤独な作業であった。土屋は『カルティニの風景』のなかで作家プラムディヤとカルティニについて次のように書く。

時代をつきぬけ社会をつきぬけて生きてきた知性が、同じ知性に対してよせる「かなしみ」のまなざしがあるように思える。それは現に生きている社会から決して受け入れられず、拒否されながらも、自分の道をつきすすむものの持つかなしみである（土屋 1991:155）。

また土屋はカルティニに対し「古い時代から脱し新しい世界を求めするために力を尽くし炎を發し、そして燃え尽きて消えていった」（土屋 1991:160）と書くが、2020 年代から見るならば土屋、高谷、桜井にもこのような側面があったと思われる。とはいえ、第 1 - 3 章に見るように土屋、高谷、桜井が自らの内に抱える 20 世紀的思考・思想の制約も大きく、これもまた指摘していかなければならない点である。

21 世紀の第一四半世紀が過ぎた現在、本格的な人口減をむかえた日本と、中国を主とした一次産品需要に対応して輸出産業が伸びる東南アジアとは、い

ずれも 20 世紀とは異なる社会変化を経験している。日本では人口減少・予算減少のためもある歴史研究全体、そして東南アジア地域研究の存在意義が問われている。そのなかで、本ペーパーでは 1980 年代を中心に闘った高谷、土屋、桜井の作品の一部に、2020 年代に日本で注目され始めた問題と同質の問題意識が含まれていたことを示したい。

なお 20 世紀の東南アジア研究センターの歴史については清水展が外側から見た良質な小史を発表している<sup>1</sup>。

また河野泰之の東南アジア地域研究研究所退職時のエッセイに示される東南アジア地域研究の捉え方は筆者の考えとよく似ている。河野と筆者はともに修士課程在籍時の 1981 年 7 月に東南アジア研究センター「東南アジアセミナー」に参加して東南アジア研究を開始している<sup>2</sup>。

1985 年のプラザ合意後の円高によって、東南アジアに直接投資を行う日本企業が増え、東南アジア経済の発展を促すことになった。1982 年以降のラテンアメリカやアフリカの発展途上国は累積債務危機に直面し、世界経済は「世界恐慌」に匹敵する深刻な経済危機に陥ったが、その中で、アジア太平洋地域はこの危機を克服し持続的成長を実現した。世界銀行はこの発展を「東アジアの奇跡」と呼ぶ。この発展はなぜ実現したのかの研究が秋田茂（大阪大学名誉教授）を中心に行われている<sup>3</sup>。

#### 参考文献

- 石井米雄. 2003. 『道は、ひらける - タイ研究の五〇年 -』めこん.  
桜井由躬雄. 2013. 『一つの太陽 - オールウエイズ -』めこん.  
土屋健治. 1991. 『カルティニの風景』めこん.

- 1 「東南アジア研究所の過去、現在、そして未来へ」[50 周年記念和文誌 21 世紀の東南アジア研究 - 地球社会への発信 -] (<http://www-archive.cseas.kyoto-u.ac.jp/50th-anniversary/preface.html>, 閲覧日: 2025 年 2 月 18 日)。
- 2 「河野泰之教授 退職記念インタビュー」『CSEAS ニューズレター』81 (<https://newsletter.cseas.kyoto-u.ac.jp/nl-81/kono/>, 閲覧日: 2025 年 2 月 18 日)。
- 3 「エネルギー危機と 1980 年代のアジア国際秩序—アジア太平洋経済圏の形成を中心に」(基盤研究 (A) 課題番号: 23H00016) (<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23H00016/>, 閲覧日: 2025 年 2 月 18 日)。

---

---

# 第1章 東南アジアで見出した生態で旧世界を 区切った高谷好一の2020年代における今日性： 身体を通した日常の言葉で現象を捉え 未来を語り続けて

---

---

1991年の11月に恒例の比叡山会議が開かれた。「比叡会議」というのは、京都に関心を寄せる人たちが出席して、自由に討論を行うフォーラムである。その年の総合テーマは『諸文明の時代』（中略）。基調講演を角山栄さんがされ、河上倫逸さんが「世界史の中の諸文明」という題で話され、私が「世界地理の中の諸文明」という題で話題を提供した。私は自分では納得のいく発表をしたつもりだったが、あまり好評ではなかった。焼畑地帯の文明をヨーロッパの近代文明と対峙させて描写し、さらに、将来の世界のことを考えると、「豊かな心の文明」である焼畑文明こそヨーロッパ文明より可能性を持っていると論じたのである。

だが、これは出席者の多くには、「東南アジア屋」の暴言と聞こえたらしい。上山春平先生からは「高谷君、気持ちは分かるけれど、もう少し他人に理解されやすく話さないといけないよ」といわれた（高谷 1997:218）。

海外学術コロキウムでは、東南アジアを商業的多雨林多島海の世界、アフリカを閉鎖的農牧大陸として対比する高谷好一の問題提起が大いに議論を呼んだ。コロキウムに参加したアフリカ研究者の側では、大まかで荒っぽすぎるアフリカ理解であるとして反発が強かったように思う。しかし高谷は、むしろ意図的に大まかな特徴を基礎に据えて比較を試みたのであろう。「地域研究の一つのやり方は、できるだけ鮮明にその地域の特徴を際立たせ、比較することである。たとえ、実際には極めて複雑なものであっても、単純化し、地域の売り物をはっきりとさせ、こうして相手にも理解してもらい易い形にして、比較をしていくことである」。だから「アフリカと東南アジアの違いはライオンと船だ、ぐらいのところから考えてみる！」（高谷 1996:4-5）ということであった（掛谷 1999:402）。

## 1. はじめに

高谷好一はフィールドで物と物、現象と現象を直接比較して類似性と差異性を引き出す才能のある人だった。これは多くの研究者が持たない資質である。上掲2例とも広大な地域の比較であるが、決して外来コンセプトを介在させず直接比較をしている。しかし比較が大規模になるとアカデミズムの枠組を最優先事項とする研究者から批判を浴びやすかった。以下、高谷が作品を作っていく姿勢・奮闘、アカデミズムとの関わりを中心として、高谷自身が20世紀的な常識に捕らわれながら、それでも2020年代の潮流に連なる思考を追求した姿勢を見ていきたい。

高谷は1934年3月18日に滋賀県守山市で生まれた。京都大学理学部を経て、同大学院理学研究科を修了し、その後京都大学東南アジア研究センター助手・助教授を経て、1975年より同教授に昇格した。1995年から2004年まで滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科教授、2005年より聖泉大学総合研究所所長・教授を務めた。2016年3月12日、滞在先のインド・チャンディーガルのホテルにて81歳で没した。本章が扱うのは1990年代までの高谷の思考である。

## 2. 研究姿勢・方法

高谷がセンターに着任直後の1966年、石井米雄は高谷について次のように記している。

センターに新しく着任したばかりのTさんが、調査のためにバンコクにやって来た。Tさんは京大理学部の地質出身で、学生時代に探検部長をつとめたという根っからのフィールドワーカーである。

初対面のTさんについては驚いたことがたく

さんある。まず彼が日本から持ってきた鞆は、私のために持ってきてくれたという煎餅の缶を取り出してしまうと、あとはほとんど空っぽに等しかった。20キロの重量制限をいつも気にしながら旅行の用意をした自分と比べて、まずその差の大きさに度肝を抜かれた。

徹底したTさんの旅行態度は、着替えをほとんど持ってきていなことにも表れていた。洗濯して乾くのを待ちさえすれば、よけいな着替えなど不要である。というのがTさんの経験則にもとづく信念であったようで、事実それを実践していた。旅装を解いたTさんはボールペンを一本買ってきた(筆記具さえ現地調達だ!)。それから町に出て、今度は一日がかりでバスの運行状況を綿密に観察し、その結果をフィールドノート代わりのカードに克明に書き留めた。こうしてTさんは、またたく間に私以上のバンコク通になってしまったのである。

このTさんと一緒に東北タイを旅行しながら、私は地形の見方の手ほどきを受けた。これまで文献だけを読んで歴史の勉強ができたつもりでいた私にとって、Tさんとの出会いは衝撃的なものがあった。私はのちに農業を自然環境の利用と関連づけて、タイ史の新しい時代区分を提唱したのだが、そこで示された思想の原点は、この時にTさんとした東北タイ旅行の経験にある(石井 2003:139-140)。

この地形の見方について、桜井由躬雄は1980年代の思い出として高谷の地図の使用法を次のように書いている。

センターの高谷好一先生の研究室は変わっている。16畳ほどの天井いっばいに東南アジアの50万分の1の地形図が張り巡らされている。天井地図の下には大きな長方形のテーブルが置かれている。先生は手が休むとこのテーブルの上にあおむけになり、双眼鏡で地形図を追っていく。気球にのって大空から調査している気分になるという。ただし、先生はその地図がカバーするところはほとんどすべて歩いている。だから、双眼鏡下の風景がそのまま浮かび上がる。この奇妙で仙人のような作業の結果が高谷学と言われた地形分類であり、世界単位論であり、デルタ分類だ(桜井 2013:60-61)。

日本にいたとき、私は高谷先生に訊いた。先生のように、ちらりと見ただけで地域の地形を

すっばすっばと分析し、そこから農業のあり方、社会のあり方、ついには歴史の概観まで見通すようになるにはどうしたらいいですか。高谷先生は答えた。桜井さん、5万分の1の地形図にトレーシングペーパーをかけて、すべての情報を手書きしてごらん下さい、それが100枚くらいたまったら、地形区分とは何か解ります。そのあとでまた付け加える。桜井さん、15万キロ走ったらまた話をしましょう。(中略) そのころは東南アジアの5万分の1の地形図を入手することは至難の業だった(中略) そういう高谷先生でさえ、地形図となれば旧日本陸軍作成の地図を使っていたくらいだ(桜井 2013:66-67)。

フィールドでの高谷の作業については、桜井をはじめとして多くの同僚が記憶を持っていた。学際共同研究でマイクロバスに同乗してフィールド調査を実施したのち、一行は昼間のストレスを晴らすために夜は酒盛りをするのが通例であった。しかし高谷はひとり黙々と、昼間書いたフィールドノートの内容を京大式のカードに書き写していた。また高谷は着替えを一組のみ持ち、夕方の水浴びの時に洗って干していたと言う。

### 3. フィールドワークの代表的成果

高谷は、前項に述べたような方法で地形、生態、土地利用をつぶさに見て歩いて書き留めたフィールドノートを利用して、地形分類法を編み出し、のちに景観学的手法として自ら認識するようになった。高谷自身が1980年頃になって、やっと地域研究らしいものをはじめようになると書いている(高谷 2001:454)。チャオプラヤ・デルタの地形分類と変貌を詳細に描いた『熱帯デルタの農業発展－メナム・デルタの研究－』(1982)は同僚の誰もが認める実証的地域研究の成果となった。さらに高谷は東南アジアの主要部について土地利用の概説書を書いた。『東南アジアの自然と土地利用』(1985)は研究者が自らの調査地域を東南アジアの生態の中に位置づけるため、あるいは東南アジア全体の講義をするときに大変便利であった。ただし現在では開発が大規模に進んで生態が大きく変化し、現状としてそのまま使用することはできなくなった。

高谷は歴史へも関心を寄せ、当時東南アジア研究センターの建物を利用して開催されていた「漢籍を読む会」、「東南アジア史学会関西例会」にも出席していた。このような歴史知識の蓄積の中で、中国史

研究者が「高谷ショック」と呼ぶ研究のブレイクスルーが中国史で起きた。桜井由躬雄は以下の様に誇らしげに描いている。

センター建設以来14年、鍛えに鍛えた地域学がいかほどのものであるか、ディシプリンに挑戦する機会が来た。そのころ私は地質学や農学を習う目的で、高谷先生と毎晩、中国の農業技術書を購読していた。そのなかで先生がこれまでの東洋史で定説となっていた農業史理解がおかしいと言い出した。先生や福井氏によれば、中国古代の農法、火耕水耨はボルネオ山地で今も行われる水田焼き畑のことだし、宋代の大輪中圩田は粗雑な馬蹄形輪中にすぎなくなる。占城稲はアウス系のときなし稲になる。漢文を精査しても先生の言い分は正しい。むしろ今までの農業を知らない歴史家の漢文の読み方が間違っていたのかもしれない。これはいける。社会学の坪内助教が中心になって、日本中の高名な農業史家を招待することになった。(中略) 会議は(1979年7月)3日にわたった。東南アジア研究者のやや粗雑な指摘に対し、天野先生をはじめ東洋史学者はいすれも真摯な対応を繰り返し、私の学者人生の中でもっとも価値あるシンポジウムとなった。この討論の結果は、1985年に『中国江南の稲作文化』(桜井・渡部編集、日本放送出版協会)から上梓された。のちに森正夫教授(名大)が、戦後東洋史最大の革命の一つと評された(桜井 2013:55-56)。

高谷はまた名エッセイストでもあった。東南アジアの人々の暮らしや考え方を日本の一般の人々に解りやすく、生き生きと描いた。東南アジアの人々にとって何が大切か、日本人は何を学ぶべきか。日本とは違う稲作の方法、放浪生活の在り方を市井の人に解る言葉で書いた。『マングローブに生きる－熱帯多雨林の生態史－(NHK ブックス 563)』(NHK 出版、1988)、『コメをどう捉えるのか(NHK ブックス 602)』(NHK 出版、1990)、がこれである。一般の日本人が当たり前と思っている日本の稲作や農民の生活を、東南アジアを含むアジアの稲作の中に位置づけて相対化したうえで、日本における米の自給問題など関係する時事問題について知識人としての意見も言う。その背景には、東南アジアなど日本と異なる地域の人々の価値観と地域の性格を聞き取るうまさ、自分で出会った様々な世界の価値観を比較して

書くうまさにあったと思われる<sup>1</sup>。この資質を持つ地域研究者は少ない。そしてディシプリンに拘泥する研究者に対して、地域の総合性、地域研究そのものが議論の武器になる。

しかし次に述べるように、「世界単位」を枠組としたより大きな規模の比較では、高谷の特性が生きずに逆効果となった。

#### 4. 世界の中に位置づける苦闘

高谷は1990年代から世界の中に東南アジア世界を位置づけることを試みるようになった。「世界単位」という用語を使用して、高谷が東南アジア研究で開発した生態史によって旧大陸を地域区分した。しかしこの試みは大きな問題をはらむこととなった。自分の体験から出た言葉と世界の多様な世界を比較することの間には越えなければならない問題がいくつもあったのである。これを20世紀に上梓された次の新書2冊で検討してみよう。

『新世界秩序を求めて－21世紀への生態史観－(中公新書 1110)』(中央公論社、1993)

『多文明世界の構図－超近代の基本的論理を考える－(中公新書 1339)』(中央公論社、1997)

このうち前者は、高谷が自身の地域研究第一作と述べ、また東南アジア研究センター在職中に同僚数人が手を入れた書であるので、これを主に使用して以下の検討をする。

『新世界秩序を求めて－21世紀への生態史観－』の中で述べられる欧米社会由来のコンセプトへの違和感の表明と批判は、出典が記されていないので高谷が自分の言葉にした表現と言える。しかし抜き出してみると以下の様にどこかで聞いたようなものばかりであり、前掲の2冊のNHK ブックスのような生態学者高谷ならではの、我々を啓発する視点はない。

「人間中心主義、合理的思考、科学技術、経済発展」(高谷 1993:2)。

「万物の霊長である人間は経済発展をしてこそ人間としての意味があるのだ、という呪文」(高谷 1993:3)。

「いつの間にか近代合理主義と経済発展は普遍原理になっていたのである。合理的思考と科学技術と経済発展、これこそはまさに20世紀の世界が進むべき大道ということになった。」(高谷

1 高谷のあとがきによれば、この2冊の書籍の編集者の力量もまた大きかったようである。

1993:3)

(ダーウィンの進化論)「二つの個体がある場合、それは生き残るために必ず競争する。すると強い者、優秀な者が勝ち、それが次代に生き残っていく。競争こそは進化の原動力であると認められたのである。進化は社会学者や一般の人々の間では進歩に読み替えられた。競争そのものは決して悪いことでも何でも無い、競争の結果、優秀な者が勝つのは世の摂理であり、それから進歩が生まれてくる。」(高谷 1997:6)  
「合理主義こそすべてであると主張した科学者たち、(中略)彼らは人間と対象を完全に切り離して理論を展開」(高谷 1997:215)。

この2冊の新書の中で、高谷が独自の視点を持ってなかった理由はいくつか考えられる。第一に、「世界単位」は高谷の考えから出た概念ではなく、1980年代末から矢野にエンカレッジされて考え始め、矢野が主張する構図をほぼ引き継いでいる(高谷 2001:456-457)。(ただし高谷は矢野亡き後の21世紀に入っても東南アジア世界のグローバルな位置づけを希求して世界単位に関する本を書き続けたので、のちにはこの概念を自分のものとしたと言える。)第二に、見聞できなかった事象について様々な文献の参照が必要なところを、自らの原則とした自分の言葉による表現を文献の引用なしに貫いたためと思われる。第三に、日本における高谷のエリート性が挙げられる。西欧近代を直接の心身の痛みとして感じ体の中を通じた言葉として、体験したことがなかった可能性が大きい。高谷の原稿を修正した同僚達もおそらくそうであったろう。彼らは京都大学に職を得た研究職の男性教授であり、家事育児その他の雑用、さらには現在と比較するならば学内行政からも解放されていたのである。

高谷は本書で近代世界システムに覆い隠されている多文明世界を描く試みを行い、東南アジア、中国、そして日本における世界単位の区分を示した。「世界単位」の語の下に人間社会が生態を生存基盤としている具体例を並列したのである。最終章では世界単位同士の共存について議論し、世界単位間の調整の難しさを語る。この規模の調整を歴史的経験や先行する理論の蓄積を利用せずに自分の体験から出た言葉のみで語ることは無理がある。

## 5. 高谷の20世紀的制約

世界単位について主観と独断が過ぎること以外にも、高谷には、近年の人文の歴史学が「欠如モデル」

と呼んで批判の対象としている専門職の姿勢が垣間見える。すなわち権威者として壇上から一方的に研究成果を述べるだけでよく、読者、聴衆と対話する必要はないという態度である。

第一に、世界単位を書く目的、そして今、なぜ世界単位が必要か、世界単位を提示すると従来と何が違うのかの説明がほとんどない。高谷は世界単位を使用すると「近代世界システム」に「隠されていた個別論理の中からは、病める現代社会にとっての特効薬が発見されるかもしれない」(高谷 1993:10)と書く<sup>2</sup>。さらに世界単位を提示すると従来と何が違うのかについては言及がない。世界史の簡便な地図とどこが違うのかの説明がなく、各事例についても他の事例・文献資料との比較がない。高谷の文章を推敲した同僚の研究は地の文に取り込まれる一方で、他研究者の調査事例・議論が参照されていない。NHKブックスと比較すると生態の重要性が当然の前提とされて説明がない。新書2冊は、東南アジア発の世界単位を流布させることが最優先事項であったのかもしれない。

第二に、自分の体験を通じた言葉の徹底も、規模の大きな比較の時にポリシーとして固執しすぎると、主語の大きい一般論となり、異なる見方を受け付けない姿勢となる。

環境問題、南北問題、人権疎外、心の腐敗、等々である。これらの問題の原因は明白である。経済発展はよいことだということで、誰も彼もがより豊かでより便利な生活を求めすぎたようになったからである(高谷 1993:3)。

地球上のすべての人がより贅沢な家に住み、より立派な自動車を運転しようというのだから、たまったものではない。(中略)挙句の果ては金持ちになりすぎた社会では今度は心の荒廃が起こった(高谷 1993:3-4)。

このレベルの経済状態に達することのできない人、病気・障害のある人、シャドウワークを担う女性は、これらの表現を読んで異なる立場を封殺された気分になるだろう。本章の冒頭の比叡山会議の聴衆はおそらくハイレベルの知識人だけだったと思われるが、高谷の、西欧は人間を万物の霊長とする一神教だ大陸部東南アジアの山岳焼き畑地帯は汎神論なので優しさと潤いがあるという議論(高谷 1993:99)は、西欧に詳しい聴衆が一神教や優しさと潤いについて

2 この議論は矢野の議論であった(高谷 2001:456)。高谷は「私はすっかり洗脳されてしまった。」と書いている(高谷 2001:457)。

様々な疑問を持つかもしれないと予想する周到さが存在しない。いずれにしても一個人の短期的体験、理解を主体として一方的に語る限界が見える。

1980年代に20代30代前半の学生・研究者を持った、日本における高谷の印象は、静かであるが芯が一本通った厳しさを宿し、笑った顔はめったに見せない。講義・講演の時は遠くを見るまなざしで、自らが体験した用語で語るというものであったが、たしかにこれらは聴講する者を意識した対話的態度とは言えない。

第三に、東南アジアでの調査における対話・意見交換がほとんどない。これは20世紀後半に可能であった調査形態に大きく依存するが、そのうえで次が指摘できる。調査する人とされる人の区分は明確で、調査された人々は成人男子が主である。調査対象者は個人として描かれ家族や村のなかの階層、生活の具体的あり方はよくわからない。当時高谷がインタビューできたのはエスタブリッシュされた成年男子だったという限界は当然のこととしても、様々な見解が表出する可能性のあるグループインタビューの方法はとられなかった。一方、議論は研究チームや同僚と行われた。

西欧的普遍主義を嫌った高谷にも以上のような専門職にかかわる20世紀的制約があったと言える。

## 6. 高谷の今日性

しかしその一方で、高谷の議論や方法の中には21世紀に入り、特に2020年代の日本で重視されるようになったトレンド、なかでも文化人類学のトレンド・問題とほぼ同様な点が含まれている。それは調査する自己に関わるものである。

第一に、高谷は調査者を含む人間が自然環境から切り離されることについて生態の論理を取り上げて批判している。

「合理主義こそすべてであると主張した科学者たち、(中略)彼らは人間と対象を完全に切り離して理論を展開」(高谷 1997:215)

「彼(今西)が地球はひとつの全体だ、それは人間もその中に取り込んだひとつの全体だ、(中略)自然と人間は切り離せないのだから、人間はより大きな自然の動き、生態の論理に従ってこうというのが「生態論理」である。」(高谷 1997:216)

「自然の中で生きていく人間と言うものをまともに考えようではないか。」(高谷 1997:217)

高谷は生態と人間の身体・心を連続して捉えており、有限な体と心のある人間は環境への適応から解放されることはないと考える。研究者も例外ではなく環境が変わると研究者である自らも変わる。研究者は調査者であるとともに調査対象の生活人でもあるのである。

私は勿論今も地域研究をやっている。ところでこの分野は実に捉えどころのない分野である。学問かどうかさえ判らない。少なくとも机の上だけでは納まりきれないものであることは間違いない。今の私の場合だと、私自身の故郷への帰還が最大の問題になっている。この帰還はまだ始まったばかりだから、これからどんどん問題が出てきて、私自身が変わるはずである。こうして、今の言動は過渡的なものにならざるをえないのである(高谷 1997:221)。

高谷はある時期から、超然とした観察をありえないこととし研究者としての仕事と日常を分けなかった。日本における文化人類学が21世紀に展開した問題を1990年代に既に新書で論じていた。すなわち「私」という語を使用し、さらに「地域哲学」のすすめ<sup>3</sup>の節(高谷 1997:205-211)では、他の社会との共存を展望して日本社会における自己修正のダイナミズムを議論している。文化人類学のオートエスノグラフィ、開発人類学・文化人類学者(小國 2003; 清水 2024)が「私」<sup>4</sup>を登場させて調査社会とその変化を記述する動向、そして時代は遡るものの1960年代

3 「伝統を守りながらなおかつ現代に生きるにはどのようにすべきか、と言ったことが重要な問題になってきているのである。

私は自分の父親の葬儀と家の新築の話を少し紹介したが、底でも十代にはいろいろの問題があった。例えばこんなことがあった。一部の人たちはそんなものは不合理な虚礼だから廃止すべきであると主張した。べつの人たちはいやそれはよき伝統だからぜひやるべきだといった。後者は隣人が新築を祝福するのはそれ自体で気持ちのなごむことだし、それにこういう機会を捉えて、近所の付き合いを深めておくことは実際的にも役に立つことだと主張した。日ごろからそういう付き合いがあるからこそ、例えば、若夫婦が老いた親を家に残しておいて、勤めに出ることができるのだといった。付き合いという行為を通して近所での互助システムが実質的に機能しているのは良いことだと言うのである。

私はこの議論に巻き込まれて、ひどくしんどい思いをした。そして、近江のような小さな自形型社会も自己修正を繰り返していると実感し、同時に、こうした自己修正があるからこそ、他の社会との共存の可能性も出てくるのだ、と思わせられた次第である。」(高谷 1997:207-208)

4 清水は著書のなかで一人称の「私」を使用し、小國は「わたし」への考察を44-46頁で行う。

から提唱され始めた「個人的なことは政治的なこと」と問題意識を同じくしていた。ただし高谷は東南アジアで長期の定点調査をしていず、かつ調査時期が20世紀だったこともあり、東南アジア社会での自己修正ダイナミズムは議論していない<sup>5</sup>。

もとより自らの思考で調査対象の総体を描くこと、それらを比較してグローバルな全体のなかへ位置づけること、そして個別研究の意義を探ることは人文学の歴史、地域研究、そして文化人類学が重視している作業である。また体内で感知される非言語的の情報や沸き起こる感情に言葉を与えるのは詩人や小説家の方法である。高谷は理系出身であるにもかかわらず、価値観を含めた社会の在り方全体と、それを世界へ位置付けること（日本の相対化、欧米に対する東南アジアの対等性）に深い関心をよせ、これを自分の頭で考えることに終生固執した。自らフィールドワークの成果をより良き未来のために利用すべく高谷自身および故郷の近江、東南アジア、その他の地域を世界に位置づける希望と困難は、近年の人類学者が自らの調査研究をグローバルに位置付ける際の問題と通底している（清水 2024:264-282）。

第二に、高谷は自らの調査方法・考え方を開陳し、社会の在り方にも意見を示す。しかも方法論においては道半ばの戸惑いとともに、借り物の方法でないことにこだわり、批判を承知でひとりで方法を編み出した。これは地域研究者として少数派の姿勢である一方で、世界的な価値の転換期にあって考え方の多様性・対話の担保が必要な2020年代においては、勇気ある貢献となる。

以下、1993年新書10-14頁に書かれる高谷の方法論を要約する。

- ・世界単位（＝文明生態圏）は生態環境・そこに住んだ人間・外来文明からなり、同一の世界観を共有する人たちが住んでいる範囲である。
- ・地域研究の成果は「科学的に厳密な処理を経た産物と言うよりもむしろ芸術家の作品に似ている。その意味では一般の学者からは非科学的なもの、虚像だと非難されるかもしれない。しかし、私としては、地域研究とはこういうものしか出しえないのだと主張したいのである。」地域研究の「個別の本質的な部分は個人の感性や洞察によってしか捉

えられないのである。」

- ・芸術家の描いた絵は「外見の正確さに欠けることもある。しかし、不思議とその雰囲気や、時にはそこに住む人の心の中までを実に見事に描き出す。」
- ・調査地域の世界観について調査者は調査者でではなく、世界観を科学的に感知することはできず、解決しようがない。しかし「可能な限り虚心になって「彼」に向き合ってみよう。そんなとき、突然向こうがメッセージを送ってくれるのを感じる瞬間がある。」
- ・非科学的方法であっても、「じゃあ他にどのような方法があるのだ、これしか方法がないじゃないか。」くわえて「いわゆる科学的検討の併用」をする。そして「何人かの人たちの作品が生まれてきたら、その展示会をやったらよいではないか。」

以上の様に、高谷は本質を描き出すことに執着した。しかしグローバルなうねりが山奥の村落へも到達したことが明らかな2020年代から見ると高谷の描くジャワ世界などは静態的である。高谷の主要な調査が行われた冷戦期1970、80年代に村は大きく変わらないという議論の前提があったようであり、これも時代の制約と言えよう。桜井も1990年代までベトナム村落をそのように考えていたようである（桜井2013:185-191）。

高谷の地域研究が学問ではなく芸術に近い作品であると議論することについては本章「おわりに」で検討することとして、ここでは科学の前進した2020年代において高谷の方法が一部であれ科学的根拠を持つ可能性が出たことを指摘しておこう。

第一に、「可能な限り虚心になって「彼」に向き合ってみよう。そんなとき、突然向こうがメッセージを送ってくれるのを感じる瞬間がある。」は執筆当時には他の研究者に荒唐無稽なことであつたろう。しかし21世紀に入って脳科学が発達し、高谷の体験が科学的に起き得る可能性が開けている。

第二に、高谷は「木が靈気を発して、人間と共感する」（高谷 1993:169）と述べ、二つの体験談を披露する。高谷自身の経験として巨木の根圏には巨木の霊のようなものが満ちていたことこれと自分が繋がっているような気がしたことを述べ、またスラウェシ島ゴロンタロの長老が次のように述べたことを書く。「砂糖ヤシはプライドの高い木だが、かれがその近くに、それより低いカーストのココヤシを植えてしまった。そこでその砂糖ヤシはその後拗ねている。」（高谷 1993:169）これらもまた荒唐無稽の様に聞こえるかもしれないが、スザンヌ・シマードの『マザー

5 高谷自身の仕事と生活を分けない姿勢、および社会の自己修正ダイナミズムの議論は1997年出版の新書に集中して書かれており、1995年以降の滋賀県への帰還とそこでの体験が高谷の考えを大きく前進させたと思われる。また1980年代には東南アジアの村落は大きく変化しないものと観念されていた。

ツリー 森に隠された「知性」をめぐる冒険』(三木直子(訳)、2023、ダイヤモンド社)では樹木と菌根菌がコミュニケーションしながら協力して生き延びていることを議論している。高谷の体験に科学的根拠がある可能性が出てきたのである。

さらに高谷は7章立ての第6章で世界単位の捉え方を説明するが、第一節の生態基盤を考える、において社会の価値観の構築に、生態基盤が与える恐怖と言う人間の最も原始的な感情が関わっていることを示す。照葉樹林の森は周囲50メートルが見渡せず全体が暗いことで恐怖を感じる。そして様々な物語が作られ、超自然の力の源泉ともなることを述べる。逆に砂漠や草原で恐ろしいのは人間、すなわち外敵である。これに対して故郷すなわち自分の居場所には安堵・安心を感じる。価値観の構築の根底に感情を据えるのは第三章で取り上げる土屋健治の方法に近いが、感情もまた2020年代になって日本で注目されるようになったテーマである。

## 7. おわりに アカデミズムとの関係の行方

アカデミズムとの関係は高谷の持つ第三の今日性と言える。高谷の方法論の要約から明らかなように、高谷は自分の論じている世界単位がアカデミックでないとされれば、世界単位に関する思考を追求してアカデミズムを降りる姿勢をみせた。そして晩年まで自らの仕事を作品と呼んだ(桜井 2013:236)。

高谷本人は科学であることを必要としなかったが、小説とはことなる芸術的な作品や一般的啓蒙書という選択肢のほかに、大きな枠組や仮説を提出する高谷の思考過程の報告としてアカデミズムの地域研究の一部とならないであろうか。一方、地域研究全体について100%エビデンスを必要とする科学である必要はあるのだろうか。ちなみに批評が学問の根幹である人文学は今世紀、科学という表明をやめている(Human science → Humanities)。いずれにしても高谷の方法論の開陳は、21世紀において地域研究の社会的意義は何かを考えるきっかけの一つとなる。

次も社会的意義を考えるきっかけとなる。学問の制度化、マニュアル化は十分なエビデンスの獲得が必要な知的生産を効率的にする。しかし2020年代は価値観の巨大な変動にあって、制度化した学問によって立つ基礎的土台が揺らいでいる一方、人口減少の日本では、知的生産に優先順位をつけていく必要がある。今、なぜこれをするかの説明責任が問われる時、以下の高谷の考え方は重要である。

自分で考えると言うことは苦しいことである。あ

まりの苦しさに、しばし逃れたいくなる。他人まかせにしたいこともある。しかし、そこを頑張るのである。こうして、いったんやり通してみるとそこから大きな収穫が得られる。一度それをやってみると、生きるということはいかに痛みがともなうものかということを知ることができる。自分が痛みを感じてみると、他人の痛みも感じられるようになる。私はこのところが大変大事だと思っている。

現代社会で最も大きな問題の一つは、人々が痛みを避けすぎることである。肉体的苦痛や精神的苦痛は原始的なものに付随したもので、それから脱却することが進歩だ、と人々は考えている。そう考えて、いろいろの仕掛けを作ってきた。道具、装置、組織。これらに頼っておれば自分は体を張らなくてもよく、楽である。普遍論理と言うのも同じである。これに頼っておれば自分で考える必要はない。オウム返しにそれを繰り返しておればよい。楽である(高谷 1997:208-209)。

高谷は晩年まで研究の意味、意義を考え抜こうとする姿勢を崩さなかった。

たぶん私にできることは「生態の意味を突き詰めてみる」と言うことです。今一つは「百姓とは何なのか」を考えることです。作品にはならないかもしれませんが、これしかないと考えています。(2012年11月)(桜井 2013:236)。

この考え方は、梅棹忠夫、川喜田二郎など京都学派フィールド派の「自前の思想」に連なるものかもしれない(清水・飯嶋 2020:第7、8章)。そして高谷の主張する意味の追求と身体を経由した思考は、人間にできてもAIにはできない、あるいはできるようになるまでに長い時間のかかる作業である。

高谷の世界単位論関係の作品は当時、東南アジア研究センターの同僚からも実証がないと批判され、今も厳しい批判を浴びている。その意味で高谷は東南アジア地域研究者のアカデミズムからも離れた。しかしその一方で21世紀に、京都大学学術出版会から数冊の「世界単位」に関わる一般書を出版しており、一般の読者に需要があったと考えられる。これはどういうことか。21世紀における高谷の中での思考の進展と時代状況については別の機会に追ってみたい。

## 参考文献

高谷好一の主な著作

- 高谷好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展－メナム・デルタの研究－』創文社.
- 高谷好一. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』勁草書房.
- 高谷好一. 1988. 『マングローブに生きる－熱帯多雨林の生態史－』(NHK ブックス 563) NHK 出版.
- 高谷好一. 1990. 『コメをどう捉えるのか』(NHK ブックス 602) NHK 出版.
- 高谷好一. 1993. 『新世界秩序を求めて－21世紀への生態史観－』(中公新書 1110) 中央公論社.
- 高谷好一. 1996. 『「世界単位」から世界を見る－地域研究の視座－』京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 1997. 『多文明世界の構図－超近代の基本的論理を考える－』(中公新書 1339) 中央公論社.
- 高谷好一(編著). 1999. 『地域間研究の試み－世界の中で地域をとらえる－』京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 2001. 『新編「世界単位」から世界を見る：地域研究の視座』京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 2004. 『地域学の構築－大学改革の基礎－』サンライズ出版.
- 高谷好一・安土優. 2004. 『二人の湖国－安土優の作品×高谷好一の美しい湖国－』サンライズ出版.
- 高谷好一. 2006. 『地域研究から自分学へ』京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 2010. 『世界単位論』京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 2017. 『世界単位日本－列島の文明生態史－』京都大学学術出版会.

- 石井米雄. 2003. 『道は、ひらける－タイ研究の五〇年－』めこん.
- 小國和子. 2003. 『村落開発支援は誰のためか：インドネシアの参加型開発協力に見る理論と実践』明石書店.
- 掛谷誠. 1999. 『東南アジアをどう捉えるか(5) アフリカ世界から』坪内義博(編著)『「総合的地域研究」を求めて：東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会. 399-415頁.
- 桜井由躬雄. 2013. 『一つの太陽－オールウエイズ－』めこん.
- 清水展. 2024. 『アエタ：灰のなかの未来：大噴火と創造的復興の写真民族誌』京都大学学術出版会.
- 清水展・飯嶋秀治. 2020. 『自前の思想：時代と社会に応答するフィールドワーク』京都大学学術出版会.
- スザンヌ・シマード(著). 三木直子(訳). 2023. 『マザーツリー：森に隠された「知性」をめぐる冒険』ダイヤモンド社.
- 土屋健治. 1991. 『カルティニの風景』めこん.

---

---

## 第2章 桜井由躬雄の前近代東南アジア国家論が照らす2020年代インドネシアの動向：一次製品の海外需要・物流ルートから見た政治統合

---

---

中国大陸は羊と麦の世界から米と魚の世界へのゆったりとした遷移帯だ。中国文明は、さまざまな地域文化を強引にまとめたものに過ぎない。一方、ビルマドライゾーンのような例外はあるにせよ、東南アジアの食の基本は魚と米だ。ベトナムやジャワのような変異はあるものの、大部分の土地では高床式住居が保たれている。ベトナム人を除けば腰巻き（サロン、ロンジーなど）が衣の基本だ。どれも湿潤高温で海の中に生まれた東南アジアの気候環境に適した生活要素、つまり文化だ。確かに東南アジアには一つの文明がないが、代わりに東西6000キロ、南北4000キロにわたって文化的統一帯、「東南アジア文化」が連なる。東南アジア史は、環境と言う大枠の中に人文現象を位置づける新しい歴史学だ。

こんな不逞の志を持ち出したのは、タイから帰国した1979年暮れのことだ。この志のこと初めが、坪内先生や高谷先生とともに企画した『江南デルタ稲作史』のシンポジウムだ（桜井2013:76-77）。

私の素稿を石井先生が半年かけて推敲し、1985年になって『東南アジア世界の形成』（世界の歴史シリーズ12）が出版された。複数の歴史家に引用、紹介されたと言っても、売れた本ではない。しかし私はこのわずか100枚超の原稿の中に、私が歩き、考えた東南アジアのすべてをたたきこもうとした。東南アジアは文明を生み出さなかった。しかし、その豊富な自然は東南アジア全域に豊かな文化を作り上げた。その文化地域は、その豊富な熱帯産物を他の文明世界に供給し続けた。その代償として、中国やインドの文明が入って来た。しかも東南アジアは世界の海、太平洋とインド洋を結んでいる。最初は港市国家が林立し、ついで港市国家連合が生まれ、一方、陸上では産品を流すための河川や陸路のネットワークができた。陸のネットワークを支配する

「帝国」が生まれる。海の物流の発展とともに、「帝国」より合理的な大河川を軸とする「王国」に分割され、現在の民族国家の基盤を作っていく。海の国家類型ヌガラ、陸の国家類型ムアン駆使し、一国発展史をまったく無視し、今でいうグローバルヒストリーの走りのような歴史だったと自負している。（中略）文明の歴史ではない、文化の歴史、つまり知識人の書き物から「読み解いた」歴史ではなく、「見た」もの、「感じた」もの、つまり庶民と同じ目線から歴史を構成しなおしてみる。海と島、海とデルタ、森と水田、貴族と商人・農民がともにシェアしたはずの「歴史空間」を書きたかった（桜井 2013:83-85）。

### 1. はじめに

上述の二つの引用は概説『東南アジア世界の形成』（1985、講談社）にかけた桜井由躬雄の意気込みを示している。この考え方は2015年に英語単著で東南アジア史概説を上梓したA.リードとも共通している（リード 2021）。しかし桜井の概説は短さもあって国家の展開が前面に出、生態・生活文化は最初の方に略述されるだけに終わった。桜井は国家と村落の理念の人であった。

1945年に生まれ2012年に没した桜井由躬雄の業績で2020年代に意義を持つものは少ない。主著『ベトナム村落の形成』（1987、創文社）は誰もベトナムに行けない時代の東洋史学の業績として秀逸であった。太古から続くと思われた水田共同占有の村落共同体が歴史的に形成されてきたことを論じた。史料に列挙されている村落名を地図に落とし込む手法と農学の知識を活用し1980年代には画期的であった。しかしその後ベトナムへ外国人の入国が可能となり史料革命による研究業績の累積で、第一線の文献ではなくなった。

また1990年に京都大学東南アジア研究センターから東京大学文学部東洋史学科に移った桜井は主著を

地域研究の業績と考えていた。しかし、

あるとき、東南アジア研究センターでかつての在籍者の業績評価の試みがあった。私の文学博士論文（『ベトナム村落の形成』）が俎上にのぼった。地域学（地域研究—引用者注）の業績とは認められないと言う評価だったと聞いた。それまで、センターの地域学の中心にあった。センターとは俺のことだと、自負もし、人にも語っていた。地に落ち込むような思いがした。もちろん文献学に戻れる訳ではない。文献学からも地域学からも捨てられた。結構殴られ弱い。酒に逃げ込んだ（桜井 2013:123-124）。

地域研究の研究スタイル、方法をとっても地域研究の業績・作品を生み出せるとは限らない。桜井の業績の中で地域研究の論文・作品はほとんどないと言える<sup>1</sup>。1990年代に開始された紅河デルタ・バココック村の村落調査は東南アジア研究センターの地域研究の王道を行く調査方法がとられたが、史資料を大量に収集しつつも研究業績・作品として実を結ぶことがないままに、桜井は2012年12月に亡くなった。

桜井は理論・理念が勝った研究者であった。西欧社会由来の概念の東南アジアへの導入を嫌いつつも、自ら作ったコンセプトを類型として東南アジアの広範な部分に当てはめようと、もっと言えば、押し付けようとする姿勢が見られた。叙述の背後にマルクス主義的生産関係や発展段階論の幻影がちらつく表現もあった。また東南アジアを、生態でユーラシア大陸に位置づけても、高谷とは異なり自ら考え出した枠組でグローバルに位置づけることはなかった。高谷のように自らの研究の社会的意義を考え続けることもなかった。

今振り返ると、村であれ国家であれ総体を描くことをしていない。ドイモイ以降のバココック村の変化は「食べる経済・稼ぐ経済」と単純化する一方で、村落内部の社会関係の把握に失敗している。国家の類型も内部のシステムを描くことはなく、国家や地方政権と村の闘ぎあい関係も具体的に描くことはなかった。交渉を描けない人だったのかもしれない。総体（すなわち、いくつもの要因の組み合わせ）が描けないということは、高谷、土屋のように感性によって現場の物事を捉え、言語化をすることができなかった可能性に繋がる。高谷、土屋が特別な才能

を持っていたと言えるが、地域研究では、多少ともこの方法で調査対象の心の内側を推測しないと社会関係を描くことは難しい。これに対して桜井は次のように感性を拒否した。

駒場の東大教養学部大学院の国際関係論の修士課程に入ったばかりの土屋さん、まだ24歳、東洋史学科の大学院入試試験に落ちて浪人していた私は22歳だった。つくづく幼かったと思う。私は生硬で単純な唯物史観を繰り返していた。しかし土屋さんは理論で分析しえない「民族主義」の感性的な側面を論じていた（桜井 1997:427）。

1969年、1970年、土屋さんがジャワにいたころ、学園闘争の崩壊に関わってきた私は、思想、政治、宗教の類には不可知論の立場をとっているし、少なくとも学問の場で語ろうとしない。（中略）机上、秀才の思想史研究にはかなりの程度、軽蔑の気持ちを持っている。つまりは「あいつらには『運動』が、『思想』がわかるものか」という気持ちだ。土屋さんも、私の議論、つまり思想分析不可能論には基本的に賛成であると言う。しかし、土屋さんは不可知なものを必死に表現しようとして努力するのが学問だと言う。不可知なものの研究はやめるべきだと言う桜井は、結局不可知なものに感動していないからだと言う。

しかし、人は思想のために死ぬことができる、土屋さんは言う。民族主義はたしかに野蛮で非合理的なものかもしれぬ。しかし、かつてアジアの何十万という青年たちが、ナショナリズムのために死を選んだではないか。土屋さんは思想に感動する人々に感動する（桜井 1997:430-431）。

桜井は自らの欠陥を薄々理解していたのだろう。『緑色の野帖』の終章の最後に土屋を回想して次のように記す。

土屋さんの死後約1年、自己の地域研究への挫折を感じるたびに、土屋さんの全生涯と、その光り輝く業績が巨山の様にそびえたつ。土屋さんとの数限りない論争のあと、理論的に勝利したはずなのに、研究室の扉を閉めた瞬間に感じさせられる敗北感と同質なものを、今また冷え冷えと感じている（桜井 1997:435）。

1 学位論文「ヴェトナム紅河デルタの開発特性と水田水利の発達過程に関する研究：東南アジア主要河川デルタ開発との比較において」東京大学、博士（農学）、1992（未公開）は地域研究の業績と言える。

桜井のほとんど誰彼構わない長年の悪口・攻撃、人間関係の悪さは相手の心、社会関係を理解しえないコンプレックスから来たのかもしれない。

その一方で、歴史学が書いたもので勝負する学問であるとすれば、桜井の書いたものなかで現在一番インパクトがあるのは彼の自分史であるエッセイ集『一つの太陽－オールウェイズ－』であろう。桜井が東南アジア研究センターの助手に採用されて以来、先輩地域研究者への強い憧れと、自ら掲げた「歴史地域学」を持って東南アジア、世界を旅したこと、1990年代より開始されたベトナム紅河デルタ・バクコック村での調査のこと、そして急死の直前までがスピード感のある筆致で描かれ、状況を知る人には桜井の憧れと本気で突き進んだバイタリティが一種の感動を呼び起こす。さらに自らの弱さもさらけ出す自分語りの上手さとともに、背景として1960年代から2010年代初頭に至る日本、東南アジアの歴史、学界動向が描かれる。学生や若手研究者にも読んで欲しい本である。

## 2. 『東南アジア世界の形成』

では桜井の業績の中に、地域研究的な業績はないのであろうか。社会関係に関する感性の言語化がなくても研究できる分野がある。東南アジアは有史以来中国をはじめとする遠隔地の文明圏に一次産品を輸出し続けて今に至る。今日においても東南アジアの地域的特性と言える。この特性を捉えた概説書として石井米雄・桜井由躬雄著『東南アジア世界の形成』(1985) (以下『世界の形成』と略す) を挙げたい。執筆の背景は本章の冒頭に掲げた。本書の強みは桜井が広く旧大陸を歩いていることだろう。「東南アジア史を各国史で終わらせたくない。フィールドによって環境と人文現象の一致をつかむ。私は狂気のように東南アジアと日本を駆け巡る。」(桜井 2013:77) その後南スラウェシ、ジャワ島、スマトラ島、日本の西南諸島、沖縄各地、インドのタミルナドゥ、カルナータカ州、スリランカ、カルカッタ、デリー、カシミール高原。フランスを旅して、『世界の形成』が生まれた(桜井 2013:68-72; 77-79)。

当時の日本の歴史学界では、「高度な文明がないところに歴史はない。ゆえに東南アジアに歴史はない」という圧力が強かった。石井・桜井は本書の冒頭に次のように書いている。

文化を普遍的精神文化のみに局限して考えるならば、たしかに東南アジアは、中国、インド、ヨーロッパのような世界的文化をまだ創造していない。(中略)しかし文化をひろくとらえ、農業をもこれに含めるならば、東南アジアの湿潤水稲作は、西アジアを中心とする乾燥畑作農耕

と並んで、旧世界の農法を二分する一方の中核とあってよいであろう。むしろ中国やインドはいわばその両者の遷移帯にあたり、日本やヨーロッパはまさにその辺境に位置することになる。人間の生態的空間として、東南アジアは独自の意義を主張できる地域なのである。(中略)

われわれもまた、東南アジアの歴史を、「中国とインドのはざま」や、植民者によって「発見」された地域と言う視点からではなく、そこに住む人々の主体的な営みの軌跡としてとらえてみたいと思う。そのための一つの試みとして、東南アジアの国々を、ヨーロッパ研究の所産である「国家」という概念からではなく、東南アジアの人々自身が、彼らの作り上げた様々な形の政治統合をなんと呼んだかに着目し、その呼称を東南アジア史の分析に用いることにしたのである。(中略)

我々の意図は、すぐれた先達たちの業績を否定することではさらさらしない。ここで試みようとしているひとつの「知的実験」が、これまでの研究の蓄積なしに不可能であることは言うまでもないからである。われわれはただ、これまでの研究を、別の角度から眺め直すことによって、東南アジアの歴史に新たな光を照射することができるかもしれないことを念願している(石井・桜井 1985:7-8)。

このように、石井・桜井は「はじめに」で東南アジアの生態、生活文化の一体性を主張する。しかし本章冒頭で述べたように本文は国家概念にこだわった内容となった。20世紀的制約と言えようか。桜井は書く。

ふつう近代国家の概念は、確定された国境に囲まれた領域、独立主権、近代官僚制、軍隊・警察など暴力機構の国家による独占など、数多い属性の規定がなされる。いうまでもなく西欧近代国家の成立から帰納された概念である。しかし、その西欧においてさえも近代国家は、15世紀から19世紀にかけての長い年月をかけて、さまざまな前近代的国家形態を淘汰し、止揚してはじめて成立してきたものである。しかもなお、その内に小邦の連邦国家・都市国家を含んでいる。

その歴史的成立過程をまるで異にし、しかも現在なお「近代」国家の建設に進みつつある段階にある東南アジアの歴史的諸国家を、西欧の近代国家概念を適用して論じることは、適切で

ない。したがって、東南アジアの歴史を考えるにさきだって、東南アジアに生まれた国家の性格を分類し概念化し、それを近代の国家概念の中に位置づけ直す作業が先行する（石井・桜井 1985:37-38）。

このように桜井は東南アジアに欧米由来の国家概念を直接使用するのではなく、欧米国家を比較の対象として相対化する努力を謳う。しかし桃木が批判するように、桜井は理解が困難となるほど多数の国家類型を生み出した（桃木 2013:53-54）。さらに地元の言語を直接使用することも、その後40年の時の流れが、良策ではないことを教えた。

しかし21世紀に中国の台頭を中心とした世界の急速な動向変化が起こり、中国の一次産品需要に注目した桜井の国家論の一部分が2020年代東南アジアの動向を解釈する枠組として使用できる可能性が出てきた。

1980年代に欧米および日本の東南アジア史学界では、農業国家でも農業そのものは小さな地方権力を生むだけで、大国家を成り立たせたのは交易である、農業発展も交易を支えるため、輸出のためなど交易の刺激によって起こったのである、と言う議論が一般化する。この地域で貿易が活性化した1980年代と言う時代がこれらの説を生んだ（桃木 2013:48）。その中で本書は、世界に冠たる日本の中国史および生態の知識を活用しており、欧米の議論に比較して抜群の密度を持つ。中国市場への輸出の中心地にできた政権が、生産地・生態、生産地に至るルートを拡大・征服する姿を描き、これまでの王朝興亡史を、一次産品集荷のためのルート制覇の争いへとダイナミックに変換した。一方、粘り強い交渉や協力の側面は、史料に現れないこともあってあまり書かれない。また各時代の中国史料における東南アジア関係記事の主な内容は、南海の産物の集荷に関する情報であり、この史料の特性をそのまま生かした無理のない利用方法である。本文の記述は仮説・推測に満ちたものであるが、仮説・推論を行う理由が国家による一次産品集荷ルート制覇の争いの解明と明確であるために意見を異にするものも納得の上で読める。さらに桜井は高谷が推奨した東南アジア縦走を実行したおりに1970・80年代の人々の営みの変化を目撃しており、その国家の動態の描写にリアリティを与えている。

### 3. 概説要約 紀元前後から18世紀まで

『世界の形成』の本文では各章ごとに東西の文明の

地の動向が略述されたのちに東南アジア国家の対応が描かれる。なかでも中国大陸の統一による東南アジア産一次産品需要の拡大と、分裂による需要の減退に、東南アジアの政治組織が対応する姿が描かれる。東南アジア都市国家連合が中国に対して輸出に有利な形で国家を名乗り、中国の需要が増大すると繁栄し、需要が減退すると消滅する姿が描かれる。また広い領域を持つ国家では、中国の需要増大時に一次産品生産の拡大を目指して、労働力維持のために新技術を導入した稲作の拡大が議論される。このように東南アジアでは在地の生産関係が内部から国家を生み出したのではなく、各地域の自律性は現実の外的状況への対応として現れたが、この外的状況の強調は自立性の否定ではないことを付言しておきたい（桃木 2013:53）。

以下『世界の形成』における叙述を、21世紀と比較することを前提として要約するが、インドネシア海域の叙述のうち、本書の特長を伝える部分は長めに引用した。

紀元1世紀にモンスーン利用が紅海から開始されると、東南アジアにも影響が及んだ。西暦100年頃ベトナム中部の林邑、交州が海路で中国に朝貢するようになり、後漢とローマが栄えた3世紀にはメコンデルタに扶南が栄え、マレー半島、ジャワ、スマトラに存在した国の産物の集荷の結節点となったと考えられる。

また3世紀から6世紀に至る中国江南諸王朝のもとでは仏教貴族文化が栄え、燃やして使用する香料の需要が増大した。この中国市場の拡大によって扶南が後背地に広域に影響力を及ぼしたほか、中国に朝貢する東南アジアの国々が増加した。当時モンスーンを利用した大洋航海技術にはインド人が優れており、東南アジアの港市国家の王たちがインド文明の受容を開始し、国家の編成原理とした。たとえば4世紀に扶南はインド文化を本格的受容したが、支配域拡大に利用したと推測される。なお船舶と航海術については宋代まで圧倒的に西方の技術が優れていた。

6世紀末に中国は隋唐帝国によって統一がなされ、大運河の開通によって南海貿易が当時の中国の中心部であった中原に繋がった。東南アジアとの交易量は飛躍的に増大し、港市国家群に輸出増加の対応を迫った。東南アジア大陸部では物流の拠点が周囲の一次産品生産地を広域に支配する国家が誕生した。ベトナムの安南都護府、カンボジアの真臘、タイのドヴァラパティなどがこれに当たる。なかでも真臘は扶南支配下の内陸中継基地であったものが自立し、後

に扶南を併合した。真臘の発展は、平原地帯にインド農法を導入し食糧供給を安定・増大させたことにあると考えられる。一方、島嶼部では東西交易にマレー半島横断ルートが使用されていたが、マラッカ海峡が使用されるようになり、唐代にはマラッカ海峡を武力支配したスマトラのシュリーヴィジャヤが栄えた。その後8世紀にはジャワ島の内陸から勃興したシャイレンドラ朝がマラッカ海峡を含む国際交易の制海権を握った。しかし9世紀に唐が衰えると、唐との交易を担っていたこれらの国家は姿を消した。

その一方で9世紀には稲作を主要な経済基盤とする内陸国家の勃興が認められた。カンボジアではアンコール王朝が創始され、北ベトナムで呉権の自律、ビルマでピュー国、ジャワ島で古マタラム朝が興った。これらの国家では支配領域内で地域間交易網が発達していたと考えられる。

その後960年に中国で宋朝(1279年まで)が興り中国本土が安定した。桜井は次のように述べる。

第一の影響は中国における消費市場の拡大である。華北の戦乱をよそに、比較的平安を保ちえた華中、華南は、稲作を中心とする大開拓の時代に入っていた。11世紀になると中国の人口の南北比率は完全に逆転し、その巨大な農業生産力を背景として、華中、華南には、杭州に代表される巨大都市群が出現した。肥大化したこれら海岸諸都市住民の富裕な食生活は、インドのマラバール海岸からスマトラ、東部インドネシアなど東南アジア島嶼部に生産されるコショウやチョウジなどの香料の大量消費をもたらした。

マルコ・ポーロによれば、13世紀の杭州は、年1500トンのコショウを消費し、泉州の香料輸入は、当時のアレキサンドリアの100倍に上っていたと言う。これまで東西交渉の通路であった島嶼部東南アジアは、一挙に生産地としての位置づけを与えられるようになる。孤立した「ヌガラ」(港市国家—引用者注)の卓越した時代は去り、「ムアン帝国」や「プラ帝国」(山間盆地の国家、平原を領域とする広域の国家—引用者注)のように、あるいは領域性を持ち、あるいは生産地との整然としたルート網をもつものにして初めて対応できる時代となったのである(石井・桜井 1985:114-115)。

このように11世紀、12世紀の東南アジアには、生産地と内陸ルートを握る「制陸路政国家」が、諸「ヌガラ」を包囲し、これを服属させる現象

が一般的であった。(中略)

エルランガ自身バリとジャワのふたつの王家の血をひいていることからわかるように、同王の繁栄の基礎は、東インドネシアへの勢力の拡大にあった。中国人の愛好した白檀はチモールからフローレスにかけての特産であり、世界で愛好されたチョウジ(丁香)は、テルナテを中心とするモルッカ諸島にしか産しない。エルランガの治世は、まさに東西両世界においてこうした香料の大量消費が、始まった時代にあっていた(石井・桜井 1985:139-140)。

ジャワのシンガサリ王朝(『世界の形成』中の見出し—引用者注)

しかしマレー世界の外側には、同じくこの南海交易の発展によって勢力を拡大してきたジャワ勢力が控えていた。1222年、ジャワのクディリ王朝に篡奪が起こり、都はシンガサリに移された。『諸蕃志』は、このころのジャワについては次のように伝える。

「王と副王3人、2人の宰相がともに国を治めている。しかし給料はこの国の産物で支払われる。また将校の給与は金で渡される」

盆地国家にもかかわらず、すでに商業的な俸給体系ができていたようである。特産物として、白檀、ニクズク、丁香など東インドネシアの島嶼域の産物を記しているのは、これらの産物がジャワに集荷されていたことを示す。さらにコショウについてはスラバヤの近辺、トゥバンをはじめ東部ジャワ各地でとれるが、スダダのものが一番よく、トゥバンのものがこれに次ぐとされる。

さらに「コショウは原野でできるが、村落の中でも作られている。中国のブドウつくりのように、竹や木で、棚を作る。4月に開花するが、(中略)5月に収穫し、太陽にさらして乾かし、倉庫にしまう。次の年、牛車にのせて運び、これを販売する。その実は、太陽にあたってもいいが、湿っている方を好む。早魃になると、その収穫は少ない。大雨の年には収量は倍増する」とあり、その栽培法は、ほとんど現在と同じである。当時、中国人がコショウの供給をクディリ=シンガサリ王国に依存していたこと、さらに現在でもコショウの名産地であるスダダがジャワの交易圏の中に含まれていることは興味深い。

生産地ジャワが拡大すれば、いきおい香料集約国である三仏齊=ジャンビと衝突せざるを得ない。ジャワの年代記によれば、シンガサリの

最後の王、クルタナガラは1275年、ムラユ（スマトラ・マレー）に遠征軍を送りその服従を誓わせたという。こうしてジャワによる海峡「ヌガラ」の支配が決定的になったかと思われるとき、はるか北方からこの変化を許さない新しい脅威が現れる。モンゴルの南海遠征である（石井・桜井 1985:145-146）。

1260年代に中国本土はモンゴルに制圧され、第三代皇帝クビライは南海の一次産品を求めて1277年より南海諸国に盛んに朝貢を求めるが、十分な効果がなかった。そこで東南アジアに遠征軍を送った。東南アジアの元寇である。1283年クビライがチャンパへの遠征を準備すると、チャンパは援軍を求める使者を真臘、ベトナム、ジャワへ送り、ベトナムは実際に援軍を送ったと考えられる。この遠征はモンゴルの水軍が嵐で壊滅したためにチャンパは事なきを得た。1284年にはベトナム侵攻が開始され、4年に渡る抵抗が始まる。1287年にはビルマのパガン朝がモンゴルに服属するが、当時パガン朝は既に衰退期に入っていた。1292年にジャワのシンガサリ王朝への遠征が実施されるが、当時ジャワは内戦状態にあり、モンゴル軍はマジャパイト朝の成立を助けて帰還する結果となった。これらの元寇の間に大陸部では上座部仏教を信奉するタイ族の活動が活発となった。桜井は次のように論じる。

13世紀までの時代は、古代的な「制陸路政国家」が、強権をもって生産物を王都へと集約独占する時代であった。しかし中国において発生した消費の爆発的拡大は、こうした経済非合理性の存続を許さず、それぞれの生産物を、地方間ターミナル-地域間ターミナル-国際間ターミナルを経由して、最大の顧客中国にもたすルートの合理的再編を迫ったのである。とすると「タイ族の沸騰」は、各ターミナルが古代的な「制陸路政国家」から、分離独立していく過程にほかならず、13世紀の東南アジアに荒れ狂ったモンゴルの侵攻は、むしろ古代的権力の残骸の清算者でなければならなくなる（石井・桜井 1985:148-149）。

クビライ死後の14世紀にユーラシア大陸では気候が急速に寒冷化し天災も多発して農業生産が低下した。元は飢饉などの社会不安のうちに衰退し、1368年に明が成立する。明は当初、朝貢貿易のみ許す海禁政策を取ったため、中国人私貿易が衰退し、朝貢に有利な条件を備えた大国であるジャワ島のマジャ

パイト朝とタイのアユタヤ朝が繁栄した。その後15世紀初めには気候が一時的に温暖化し、明の永楽帝は東南アジアに関わる対外政策として鄭和の遠征およびベトナム侵攻を実施した。鄭和の遠征は南海の産物の集荷を目的として1405年から33年にかけて7回に及び、アフリカ東岸に達した。鄭和の遠征による東南アジアの寄港地はチャンパ、アユタヤ、ジャワ、パレンバン、マラッカ、スマトラ島のサムドラであり、すべて交易の拠点であった。港市国家であるマラッカは、この中国の後ろ盾を得て延命したのち15世紀中ごろに西方の需要を得て東西の中継港として繁栄した<sup>2,3</sup>。

2 本段落では桜井の概説に加えて、（中島 2019）で論じられている気候変動の記述を援用した。

3 桜井の議論以外の前近代東南アジア国家論で交易を重視したものに次にあげるリードおよびマンガンの議論があるが、いずれも桜井の議論に類似している。

リードは概説（2021）で次のように書く。

チャンパ「貿易を基盤とするこれらの社会は、ナガラのように一つの河川水系と広大な灌漑農業地域からの米の余剰とによって統一されることはなかった。むしろ、マラッカ海峡や山がちな大陸部東海岸の貿易ルート沿いにおいて、内陸社会への玄関口にもなるという戦略的要衝に位置した港々が、互いに競い合っていたのである。（中略）多中心で緩やかにまとまった政体（中略）複数の社会を繋ぎ合わせたのは、まず宗教、言語、物質文化の共通性である。さらに中国との貿易ではあたかも単一の政体であるかのように振舞うことで、すでに記録されている「藩国」として朝貢を認められるという貿易上の利点もあった。」（リード 2021:73-74）

「マラッカ海峡周辺の港市も宋および元との活発な貿易によって繁栄したが、そのまとまりの程度はチャンパよりもさらに低かった。シュリーヴィジャヤの首都パレンバンがチョーラ朝の攻撃を受けた後、対中貿易の中心は北方のバタンハリ川流域へと移ったが、貿易はシュリーヴィジャヤからの「朝貢」として継続された。」（リード 2021:75）

スマトラ「これらの内陸高地は、貿易港をひとつの河口に制限したり、中国市場への特権的アクセスを得たりすることで交易を統制していたが、ひとたびそうした統制力が失われると、非国家的な文系形態という本質へと回帰していった。」（リード 2021:76-77）

マンガンの王朝創始の地方物語の構造分析はマラッカ海峡・ジャワ北岸・カリマンタン南岸・南スラウェシの港市を事例としているが、いずれも国家の起源・存立基盤が交易にある。様々な地方の物語は大要次のようなプロットを持つ。港市には、超能力 (sakti) を持つローカルな出自の者がいる。そこへ豪華な品物を満載した船が到着する。船長は著名な人物であることが多い。船は故障して出航不能でとなり腕試しが始まる。戦いか賭けの場合が多く、勝ったものが船の財を得る。ローカルな出自の者がsaktiのおかげで勝利し、今や富裕になった彼の国を治める。（Manguin 1991）

リードとマンガンの議論からは、港市の政権は交易のコントロールが非常に重要であること、さらに地域では様々な港市があり多中心の構造をしていたことが解る。

ウオルタースは東南アジアに自生的な政治システムをマンガラと呼んで論じた。東南アジア社会は双系制であるた

## 4. 植民地ヌガラ（港市国家）と18世紀

マラッカは1511年にポルトガルに征服された。その後マニラがスペインに、バタヴィアがオランダになど港市国家が欧州勢力に征服され、欧州にある政権に直結するという新たな時代が到来した。その影響は当該の都市に限られていたものの、物流ルートの固定化が始まった。インドネシア海域ではオランダ東インド会社17人会が一次製品の購入を決定し、アムステルダムに価格に左右されることとなった。さらにバタヴィア、テルナテなどへの巨額投資によって要塞などを築いて長距離貿易用国際港を固定した。地方からの集荷はバタヴィアへ一極集中させ、バタヴィアへの中距離交易は中国人を利用した。

1660年代以降、香辛料の価格の大幅下落によって長距離貿易から利益が得られなくなると、領土支配・集落独占が始まり、18世紀はジャワ島全体が領土となった。内陸への道路の建設とともに地域社会との交渉が開始された。官僚制の導入19世紀の初めからである。

桜井は『世界の形成』においてまとまった18世紀像を提出していない。しかし『東南アジア近世国家群の展開』（岩波講座東南アジア史第4巻、2001、岩波書店）の「総説」の冒頭で18世紀東南アジアを概観して次のように書く。

18世紀東南アジア論の見直しは、80年代以降の「近世」概念の見直しという世界史的な流れのなかにある。岸本美緒は17-18世紀の東アジアを「今日に直接つながる過去」としてとらえ、(1) 満州王朝の成立を契機とする会秩序の多元化と朝貢世界の相対化、(2) 辺境の大開墾の時代、(3) 近代化が叫ばれた時代に超克すべきものとして措定された「伝統社会」が形成された時代とする。そのいずれの性格も、以下に述べるように東南アジアの18世紀に現れた諸事象とあい通ずる。90年代に生まれた、新しい東南アジアの18世紀論は、他世界との同時代性、つまり近世の性格を顕著に示している。

---

めに王権などの継承システムが成立せず、絶えず実力での競争が起き、王朝はアンコールなどの大王による広域の統一も基本的に一代限りのものであり、すぐに小さい単位に分解する契機を孕んだ。このマンダラ論は日本の研究者に広く受け入れられた（桃木 2013; 白石 1999）。

このように前近代東南アジアの国家は、近代的な一中心・画一的統治ではなく、リードが論じるように多中心かつ中心が容易に移動する形態で、各地域が一蓮托生共倒れにならない繋がり方の工夫がなされていた。

その同時代性は、18世紀と言う時代に東南アジアの多くの地域が、広域の国際商業システムに組み込まれたためである。18世紀に入って大都市の需要が爆発的に拡大し、かつ多様化した中国市場と、イギリスを中心に再編され拡大を続けるヨーロッパ国際資本主義市場、そしてイギリスの三角交易に代表される国際流通と分業化が、東南アジアの第一次生産品の需要を拡大し、東南アジア全域の社会を大きく変容させる。

この結果、(1) 18世紀前半にフロンティアに商業作物や鉱産資源の開発が行われ、(2) 華人などの外部の資本と労働力が富を求めて移動し、複合的な社会が形成され、(3) 発展したフロンティアにそれぞれの地域性（地域の個性）を持った自律的な政体生まれる。(4) 18世紀後半にいたって、海ではオランダやスペインなど植民地勢力により、陸では主要民族（ビルマ人、ベトクキン人、シャム人のように人口と居住面積、言語や宗教などの文化・文明構造において地域の主要な部分を構成する民族）により、これらフロンティアの諸政体を包含し、また分裂させて新しい政治的領域の形成運動が始まる（桜井 2001:2-3）。

東南アジア大陸部を専門とする桜井は、18世紀の東南アジア国家を現在に至る国民国家へ移行する直前の姿と捉えて、国家の領域内に言語宗教政治文化、経済価値など共通した文化文明複合を持つ「歴史圏」を構想した。しかしこのことは、桜井が、ナショナリズムによって「想像の共同体」として形成される国民国家と、白石隆が運転席に座れば誰でも運転できる自動車の例えで示した支配の装置としての国家システム（白石 1999b）を混同していたことを示している。『世界の形成』で追求した東南アジア国家論の側面は、むしろ装置としての国家に近い。そこで以下の節では、インドネシア国家・中央政権を支配の装置としての国家システムとして議論する。

## 5. 21世紀のインドネシアへ

『世界の形成』の叙述範囲は前近代＝おおよそ18世紀までであり、これは講談社の編集上の都合であった。岩波講座第4巻の叙述範囲も同様である。しかし20世紀末からのグローバルな展開および中国の台頭で、これらの時代区分は当初予想をしなかった意義を持つことになった。桜井の前近代東南アジア国家の議論の枠組が、21世紀の東南アジアが20世紀とは違う世界になっていること、特に筆者の専門とす

るインドネシアにおいて両世紀を効果的に対比する枠組としての使用可能性を持つようになったのである。

桜井によれば18世紀東南アジアは地方の時代・華人の世紀であり、一方21世紀インドネシアは地方分権の時代である。そしていずれも、その前の時代に比べて中国本土の東南アジア産一次産品の需要が大幅に伸びた時期であった。18世紀東南アジアでは、中国の爆発的需要にフロンティアが反応して多くの小政権ができ、これを支配領域の広い大国が抱合していった。また需要増大に対応するために新しく領域内に導入された/せざるを得なかったのは華人と華人管理の方法であったと言える。

ここで今一度桜井の国家論を要約すると、強調される側面は、輸出のためにある国家、輸出ゆえに統合されている国家である。中国をはじめとする遠隔・文明の地の一次産品需要の増減に対し東南アジアの政治統合体に対応し、場合によってはそれが支配領域内部の開発までも牽引したと議論する。また東南アジアの国家と社会には貿易の波に応じて少なくとも2つの戦略が存在した。一次産品の海外需要が強く、高価格で輸出できるときは一次産品生産・集荷に集中して食糧などは他所より調達する。一方で輸出用一次産品の価格が下落したり輸出が途絶えると、主食(稲作)生産と手工業に集中して近隣と交易する<sup>4</sup>。ただしいずれの場合も自然環境の有限性は考慮されない。このような戦略を暫定的に“東南アジア型「状況主義的多角(経営)戦略」”と呼びたい。なお住民も同様の戦略を取った(大橋・柳澤 2025)。

以上の議論で20年代インドネシアを瞥見するが、内容はインドネシア研究者であれば誰でも知っている基本的な事項である。あえてこの議論を導入する理由は、輸出入と内政の接続を試み、近代西欧社会由来の発展コンセプトからの逸脱、問題とされる事態についてインドネシア側の要因の絡み合いを探ることにある。また桜井の議論だけですべてが語れると主張するわけではなく、むしろ不確定な時代における議論の多様性確保の一つ、高谷に言わせれば「こんな方法でも何人かの人達の作品が生まれてきたら、その展示会をやったらよいではないか」(高谷1993:14)とお考えいただきたい。

21世紀のインドネシアでは、中央集権的要素の強かったスハルト時代と比較すると各地方が政治・経済における裁量権を委譲されて自主性を獲得していったのにくわえて、中国の一次産品需要の増大が

著しい。そのなかで中国史料から抽出された東南アジア1000年の国家戦略で解釈可能な事態が出現した。

21世紀のインドネシアの輸出動向を概観すると、2020年代は桜井の議論にみる中国向け一次産品輸出拡大期と言える。インドネシア20世紀末には工業製品の輸出が増大し、欧米社会を基準とした工業化の道を歩んだ(加納 2003)。しかし21世紀に入ると、パームオイルが輸出の第一位となり(主な輸出先は中国、インド)、その資本投下と交通インフラ、製油工場建設が工業化の牽引車の一部となった。石炭産業も成長していた(加納 2021)。さらに現在は石炭、ニッケルがパームオイルを抜いて輸出の第一位、二位になり、製造業の対GDP比率が20%未満と停滞する一方でコメ生産量が減少し米穀の輸入が急増している。さらに労働集約型の繊維産業が苦境に立って中国などからの輸入が行われるようになった(濱田 2024; 松井 2024)。なおニッケルは主に中国本土に輸出されている。

インドネシアへの海外からの投資、産品の輸出先をみると、スハルト期は先進国(欧米と日本)の国際援助と投資が大きく、工業用原料とエネルギーは主に先進国に輸出されていたと言える(加納 2003)。その後グローバリゼーションのなかで中国その他アジア諸国の一次産品需要が増大し、海外投資も中国およびアジア他国(インド・香港・シンガポールなど)の投資が増加し、その受け入れには地方分権化の恩恵を受けたインドネシアの地方勢力が自主性を発揮した。工業用原料の輸出先も多様となった(濱田 2024)。

この状況下で国家が「輸出の増大を支えるために導入した新技術(システムを含む)」(おそらく国家の統合維持も目的)と見なせるのは、国際機関が21世紀に推奨する考え方(ex.SDGs)、IT・環境保護技術などの導入、および中央政府の地方に対する巨額公共投資であり、今少し具体的には医療・社会福祉、社会政策系サービス(特にSDGs:1,3,4,6,7 関連)の拡大、IT関係施設の拡大、行政サービスのIT化、さらなる交通網(道路・鉄道)拡充・電力・水道整備などである。(傍線はスハルト時代にはほぼなかったもの)

一言で言えば国内におけるソフト、ハード・インフラの高密度化(イメージで言えば自動車に例えた国家システムの末端まで配線の東が肥大)と言える。このように住民の生活世界を取り巻く各側面を総合した時期区分を試みると、20世紀と21世紀の間の官僚制による地方統治の変化を検討する必要性が明らかとなる<sup>5</sup>。各種インフラに関わる様々な決定権は、中央

4 リード(2021:第2,3章)、Sakurai(1996)にもこの傾向が記されている。米穀が輸出用一次産品であった場合もある。

5 各州において同じ地方統治システム、インドネシア語の専門用語の使用、各種施設・サービスの画一化が促進され、

政府、何層かに分かれて存在する地方の支配層、そして住民のなかで誰が握っているのであろうか。他方、桜井が注目した一次産品の集荷ルートと政権の関係は、前近代のようにならずしも一致していず、地方によって異なると思われる。13世紀に「古代国家」の物流網から離脱し「中世的」活動を活発化させたタイ族のように、スハルト政権時代の物流網から離脱した/しようとしている地方もあるかもしれない。住民の対応、支配勢力の動向も、今後、具体的事例の検討が必要である<sup>6</sup>。

いずれにしても21世紀の状況は20世紀の延長としては捉えられず、国際環境の変化と技術の進歩によって中央と地方の闘ぎあい/協力、地域同士の連携や闘ぎあいを検討しないと重要な変化を捉え損なう時代に入ったことは確実であろう。

それでは、以上のように21世紀を捉えた場合、20世紀インドネシアはどのように見えるだろうか。この分野は専門の研究者が多数存在するので、桜井の関心事であった輸出用一次産品の物流ルートと政権

の関わりを中心に、以下極めて簡略に述べる。

海外投資と工業原料の輸出は第二次世界大戦前は圧倒的に欧米であり、戦後は主に欧米と日本であった。輸出品の輸出先は21世紀ほど多様ではなく、また比較的遠方であったので、インドネシア海域の中央政権にとって主要な輸出拠点・ルートの支配が容易であったと考えられる。

物流ルートに関しては、1880-1930年間にジャワ島で内陸生産地と国際港間、物流と統治の近代的画一化が進んだ。中央政府によって主要な鉄道・港の建設が行われ、村・町から地方都市、大都市へ向かう道路が固定された。この道路に沿って地方官僚制が敷かれて物流も含めた都市間の硬直した上下関係が維持された。大都市・村落間の商業は華人が重要な役割を担い、住民の生活必需品供給を牛耳った。内陸物流ルートが何を目的として編成されていたかは、極端な例であるが、大恐慌によってジャワ糖業が崩壊するとともに鉄道網も放棄され、少数の路線を除いて再利用が検討されるようになったのは1980年代であったことから解る。

独立後、1968年から始まるスハルト政権期には植民地官僚制でオランダ人官僚が配置されていたポストに軍人が配置され、国軍にコネを持つ中国人が実業家が活動した。中央政府を通じて巨額の開発援助に基づくプロジェクトが実施され、首都他少数のジャワの大都市経由で援助と資本が投下された。おそらく国土開発のモデルはアメリカでありモータリゼーションが進んだ。工業化、米穀生産向上（緑の革命）の拠点は人口が集中していたジャワ島であった。貿易が重要な時期が始まったが、輸出の花形であった石油はスマトラ島など外島が産地であるものの、石油独占国営企業プルタミナはジャカルタに本社があり、国軍との関係が深かった。この時期には外島への国家支配の本格的浸透が始まり、中央政府からの投資によって道路建設・住宅建設などが開始され、モータリゼーションが進んだ。とはいえ地方と中央の関係は地方の支配勢力上層が中央政府に従うものの、それぞれの地方では中央政府の指令を表層的に模倣するプロジェクトの「翻訳的適応」が見られた（土屋 1991:255-258; 大橋 2008）。

白石隆の官僚制国家論がジャワ島の軍・官僚・華人を論じたのは中国本土と隔絶した冷戦期を中心とした時期であり、かついまだ国政に参画する地方の権力者・実業家インドネシア人が少なかった時代であったと言えようか。1990年代に入ると支配層はこの植民地期以来の官僚制を、スハルトのファミリー・ビジネスに象徴されるように、ポストに就いたものがポストをビジネスに利用するという形で崩し始め

---

スマホの普及がこれを助長する。国民統合の作用も持ったと考えられる。

また福祉政策、行政サービスのIT化などで住民が暮らしやすくなる一方で、監視・管理が進んでいる可能性も大きい。20世紀には難しかった地方住民のアイデンティティ・語りを研究できる、する必要があることは、住民生活の一部であり、そこまで中央の統治が到達したことを示すのかもしれない。くわえて巨大システムの恩恵を受けることは、災害などで広範囲にシステムダウンした場合、その恩恵を受けていた住民が一蓮托生となる可能性がある。住民はこれらの状況にどのように対応しているのだろうか。

さらにこのような中で21世紀に有効な地域研究とは何か。おそらく20世紀とはちがうであろう。地域研究は地域の総合的理解が強みであるとしたら、たとえば開発人類学との違いは何か。

6 輸出用一次産品物流ルートと政権の関係を中心に具体例を検討する場合には、東カリマンタンにある新首都・その外港であるバリクパバンが今後物流の拠点になるか否か、は考察する意義のある事例である。新首都が面するマカッサル海峡は南中国・オーストラリアを最短距離で結ぶルートである。さらに東側のスラウエシ島はニッケルの主要産地であるほか、南スラウエシ州はこの一帯の食糧生産基地、工業化の拠点、移民の本拠地である。南スラウエシ州と周辺地域との地方分権化以降の関連を、今後10年後を見通しつつ2010年頃からの統計を利用して検討するならば、貢献となろう。

そのなかで地方官僚制による統治の変化については人文科学的統計の使用法で統治の性格/統治されない状況进行分析しえる。統計をとる権力を誰が握っているか。たとえばどの地方勢力が中央政府派遣の官僚か。を把握するために統計上の各種項目を地図に落とししていく。従来、行政機構・企業所在地と地理生態・道路網は従来結び付けにくかったが、柳澤雅之準教授（京都大学）が開発したFieldNote Archiveは極めて有効なツールのひとつと判明した（大橋・柳澤 2025）。

たが、1991年はソ連が崩壊し、この時期に狭義のグローバル化が始まったと言える（白石 1996; 1999a; 佐藤 2010）。

## おわりに 再び国家論へ

1980年代に展開された東南アジアの国家論をポランニーの国家の類型（ポランニー 2012:8章、10章）と比べると東南アジアでは制圧・支配に武力がさほど有効でない環境が伺われる。また対外交渉を国家が掌握している場合が多く、家族経済への再分配とリンクが、ポランニーの言う互酬・市場より重要である。一次産品輸出から得られる利益の大きさが伺われる<sup>7</sup>。

桜井の国家論では、ポランニーにはない国際環境の動態が具体的に描かれる。そして一次産品需要の増大と減退そして産品を運ぶ物流システムが東南アジアの国家の在り方を決める大きな要因の一つとする。桜井の描く国家は、自主性を持つものの、輸出の側面を強調することに象徴されるように、環境に依存的に対応する国家であった。それゆえグローバルな普遍性を強調してはいない。しかし欧米を主体とした、個別具体の環境に依存しない国家観・権力観を豊かにするものと思われる。そもそも環境から超然とした権力や国家は存在するのだろうか。それはとりもなおさず歴史性が存在しないということである。さらに現在では世界的に貿易動向が重要な要因となっており、しかも中国の巨大需要と輸出力によるところが大きい。国家・社会の環境への依存の重視は高谷が力説するところであり、リードが国家を忌諱する立場になかったら（リード 2021）、東南アジアが世界に提出する国家モデルとしたであろう。もちろん今後具体的事例による検証・洗練は必須である。

### 参考文献

- アンソニー・リード（著）. 太田淳・長田紀之（監訳）. 2021. 『世界史のなかの東南アジア：歴史を変える交差点』名古屋大学出版会.
- 石井米雄・桜井由躬雄. 1985. 『東南アジア世界の形成』講談社.
- 大橋厚子・柳澤雅之編著「20世紀後半南スラウェシ州中南部社会変化研究の手引き：内陸交通、中央政府の投資、そしてパトロンクライアント関係」GCRWP NO.9、2025年
- 加納啓良. 2003. 『現代インドネシア経済史論 輸出経済と農業問

7 東南アジア国家論は、本文であげた以外にも銀河系政体、小型家産性国家、劇場国家、マンガラなど、欧米を対象とした国家論に比較するとユニークな議論が多い（桃木 2013:39-44; 48-50; 55-66）。しかしいずれも生態・貿易など環境依存性がほとんどない。インドネシアに関わるものは第三章で略述する。

- 題』東京大学出版会.
- 加納啓良. 2021. 『インドネシア—21世紀の経済と農業・農村』御茶の水書房.
- 桜井由躬雄. 1987. 『ベトナム村落の形成：村落共有田＝コンディエン制の史的展開』創文社.
- 桜井由躬雄. 1997. 『緑色の野帖—東南アジアの歴史を歩く—』めこん.
- 桜井由躬雄. 2001. 「総説」池端雪浦ほか（編）『東南アジア近世国家群の展開（岩波講座東南アジア史第4巻）』岩波書店.
- 桜井由躬雄. 2013. 『一つの太陽—オールウエイズ—』めこん.
- 佐藤百合. 2010. 『経済大国インドネシア：21世紀の成長条件（中公新書2143）』中央公論新社.
- 白石隆. 1996. 『インドネシア（新版）』エヌティティ出版.
- 白石隆. 1999a. 『崩壊インドネシアはどこへ行く』エヌティティ出版.
- 白石隆. 1999b. 「東南アジア国家論・試論」坪内良博（編著）『総合的地域研究』を求めて：東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 1993. 『新世界秩序を求めて—21世紀への生態史観—（中公新書1110）』中央公論社.
- 中島楽章. 2019. 「17世紀の全般的危機と東アジア」秋田茂編著『グローバル化の世界史』ミネルヴァ書房. 121-146頁.
- 濱田美紀. 2024. 「プラボウォ新政権の経済政策を展望する」（インドネシア2024年大統領選とプラボウォ新政権の行方（アジア経済研究所 夏期公開オンライン講座 コース9）報告、2024年9月26日）.
- ポランニー、カール. 2012. 若森章孝ほか（編訳）. 『市場社会と人間の自由：社会哲学論選』大月書店.
- 松井和久. 2024. 「プラボウォ政権をどう見るか—ジョコウィ前政権からの継承と革新—」（インドネシア現地政治経済事情講演会（2024年度愛知県立大学公開講座）報告、2024年12月6日）.
- 桃木至朗. 2013. 『歴史世界としての東南アジア（世界史リブレット12）』山川出版社.
- 柳澤雅之. 2025. 「大橋厚子・柳澤雅之編著「20世紀後半南スラウェシ州中南部社会変化研究の手引き：内陸交通、中央政府の投資、そしてパトロンクライアント関係」GCRWP NO.9、2025年

### 英語

- Manguin, Pierre-Yves. 1991. "The Merchant and the King: Political Myths of Southeast Asian Coastal Polities". *Indonesia*, 52, pp. 41-54.
- Sakurai, Yumio. 1996. "Dry Areas in History of Southeast Asia". 『総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存のパラダイムを求めて（重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ）』文部省科学研究費補助金重点領域研究「総合的地域研究」総括班. 19-17頁.

---

---

# 第3章 没後30周年、2020年代における 土屋健治作品の先端性： 感情史とブリック・ヒストリーの観点から

---

---

ひととひとが心を通い合わせることができ、明日が今日よりも良くなることを信じ、勝つために闘うのではなく（場合によっては敗れることが解っていても）自分を越える価値のために闘う、そういう時間と空間を、私どもの前に、静かに、やさしく、開いてみせてくださいましたことに、ここから御礼を申し述べさせていただきます。

そういう時間と空間がたしかに存在するのだということをしみじみと思うこと、そこへの共感と想像力を除いて、＜地域研究＞をすることの意味はないと思います（池端雪浦への手紙）。（『土屋健治追悼集』刊行会編 1996:371）

学際的な雑誌『エモーション・レビュー』の最近の特集において、歴史家ピーター・スターンズは同僚の研究者たちを批判した。感情史を専門とする歴史家は、以前は、社会学者、人類学者、心理学者、そして哲学者の研究を読み、こうした専門に向けて発信していた。しかし、感情史が急激に進展する過程で、この分野は内向きになり、他の歴史家に向けてのみ、あるいは、一層狭くアメリカ史、近世史などといった特定の分野の歴史家だけに発信するようになった。今日でも「学際性」は存在するが、それは音楽、美術、文学といった人文学内の専門家との交流を指すものとなっている。いまや科学と歴史のあいだの溝は深く、スターンズは「これがどの専門家にとっても現実的な損害をもたらすであろうことを危惧する。」と断じている（ローゼンワイン、クリスティアーニ 2021:162）。

## 1. はじめに

本章は、第一章、第二章と異なり、将来執筆される、感情史を取り入れた土屋健治論<sup>1</sup>の準備ノートの役割

---

1 「土屋健治とその時代」を仮題とした論考を予定しており、

を果たす。土屋が執筆した地域研究の作品のうち『カルティニの風景』（1991）に焦点を当てる。本書において土屋が自らの感性（感情と共感）に由来する意識の表現を優先させたことの光と影を、2020年代の日本で受容された感情史の知見を通して理解し、その先端性と時代的制約を確認する。

『カルティニの風景』が出版された1991年に、歴史学の一分野としての感情史は日本では知られていなかった。欧米では1970年頃から開始されたと言うが、当時非西欧の研究はほとんどなかった。フィリピン革命の思想史を専門とする池端雪浦はナショナリズムの背景を描く本書を書評で次のように記す。

（1970年代初め、ジョクジャカルタ下宿先のジャワ人の応接室には風景画が掛けられていた。－引用者注）著者は、これらの風景画がノスタルジアの心性と結びついていることに着目する。このノスタルジアは筆者がクロンチョン音楽を聴くたびに感じる心性であり、若い日に読んだカルティニの書簡集が湛えていた感情に通じるものであった。ここから著者は、自らのうちに想起されるノスタルジアの心性をよすがにして、「美しい熱帯」の風景画と、インドネシア・ナショナリズムのとば口に屹立するカルティニが描く心象風景と、そしてクロンチョン音楽とを結び合わせて、それらの誕生と展開と再生の筋道を辿るなかで、カルティニ以降約百年間のインドネシア・ナショナリズムの風景を描き出すことができるのではないかと見通しを立てたのである（池端 1993:155）。

---

内容は、中等教育からタマンシスワ研究まで、タマンシスワ研究の終了から『カルティニの風景』を上梓するまでの移行過程、開発独裁下のインドネシア繁栄の受け入れがたさなどである。あわせて東南アジアの独立運動に若き日の自分の理想を重ねた世代の時代背景も検討する。桜井由躬雄も第三次インドシナ戦争を前にして「昔惚れた女が娼婦になったみたいだ。」と嘆いていた。土屋健治論へのメモは注に書くこととする。

池端は、土屋自身の「心性」の活用を新しい手法と見なした。ベトナム前近代史を専門とする東洋学の泰斗山本達郎も、実際の史料の取り扱いで客観的動向と意味世界の両者の把握を同時に行うのは容易ではないが、見事に展開して独創的な業績であると評価した（『土屋健治追悼集』刊行会編 1996: 551）。

その一方で、桜井由躬雄は実証性のなさを批判した。

私は土屋さんの晩年の書『カルティニの風景』をどうしても評価できなかった。それは思い込みだよ、土屋さん。（中略）土屋さんはかつてのインドネシア民族史研究のように、深いテキスト分析によって論を展開すべきで、自分の「ひとりよがり」のイメージが強すぎる。自分のイメージの押し売りはもはや学問ではない。そのころはそう思った。そのたびに土屋さんは不愉快な顔を隠さなかった（桜井 1997:432-433）。

確かに、文字資料その他の史資料の利用や具体的事例での自論の裏付けという点で、本書は弱点が多かった。専門書でなく一般向けと言うことで本書を可とする研究者が多かった。

しかし21世紀に入って欧米で感情史が盛んとなり、2020年代日本にも波及すると「あなたたちが見ないようにして来た感情と言うものが研究の上でも非常に重要なものではないでしょうか。」（森田 2023:10）という観点、およびアカデミズムの研究と社会の乖離の激しい日本の歴史学の現状から、本書の可能性が広がって来た。

次節では現在における感情への注目から感情史の動向を略述し、『カルティニの風景』の先端性を指摘する。第3節では『カルティニの風景』の具体的議論にそって、土屋の提示した、ノスタルジアがナショナリズムに繋がる論理、共感・感動が時空を超える分析を説明したのち、土屋自身のよりよい未来への希求がもたらす時間軸の枠組の解放性を指摘する。第4節では2020年代に生きる土屋の思考について、時間軸の枠組が現在まで延長可能であること、およびパブリック・ヒストリーとの交差を述べる。第5節では、土屋がなお有する20世紀的制約を指摘し、合わせてインドネシア地域研究の中で20世紀がどのような時代であったかを考える。

## 2. 感情への注目と感情史

2020年代は、SNSにおける大量のネガティブな感情表現が人を動かし、SNSのコンテンツが選挙結果

をも左右する事態が見られるようになった時代である。

政治思想史を専門とする山本圭は「現代は私的な領域に秘匿され、沈黙させられていた情念を再発見した時代であり、政治学や政治理論は感情と向き合うことを余儀なくされている。」（山本 2023:158）と言い。西洋史を専門とする小野寺卓也は「インターネットがなかったら感情と言うテーマがこれほど大事だとは思わなかったでしょう。」（小野寺・森田 2023:13）と述べる。

感情史は、欧米では歴史が長く既に1970年代に存在した。感情を観点として史資料を読み直す。「感情史とはあくまで歴史学の一つのアプローチ。新しい史料の読み方であって全く別の何かではないということです。」（森田 2023:10）

しかし2020年代でも未だ制度化されていないと言える。研究対象の感情の輪郭が確定していず、研究視角や手法が明確に存在しない（森田 2016:51）。研究対象のとりあえずの括りは、感情が生起する原因と感情が外側に現れ出たものの記録である。たとえば「大きな犬が吠えたから怖く思い逃げた。」のうち「怖い」は心理学の領域なので扱わない（森田 2020:48）。

また様々な分野を結び付ける可能性を持っている。森田は、感情史が歴史学以外の学問とも盛んにコミュニケーションしていること、多様な学際的研究が生まれていることを指摘し、さらに感情と言う言葉を使うことでより広くの分野の壁を越えられることは魅力的であると述べる（森田 2023:10,12）。

この状況は1970・80年代に土屋が研究対象に取り組んでいた東南アジア地域研究の状況に似る。そして土屋の『カルティニの風景』は、感情（ノスタルジア・共感など）によって風景画、カルティニ書簡集、クロンチョン音楽などを結び付けるほか、絵画史、音楽史、文学史、政治史など分野横断的であり、森田の言う感情史の特長を持つ。1995年に亡くなった土屋は感情史の動向を知らなかった可能性が大きい。しかし東南アジアを対象とした研究が希少な中で、事例研究として無意識に行われていた密度の高い研究と言える。

以上を踏まえて、『カルティニの風景』で土屋が使用した分析方法が、2020年代の感情史に対して先見性を持つ点をあらかじめ述べる。

- 1) 人間の普遍的な感情を掬い取るのが巧である<sup>2</sup>。
- 2) 感情の分析は史料が限られるために難易度が高く、

2 土屋は文学青年を自称し、小説を大量に読んだ。押川典昭によれば特に日本の小説、なかでも中上健次を好み、また柄谷行人の論じる日本の風景の誕生にヒントを得たという。

近代かつ親密圏、共同体に限定されがちであるが、多数の人々の共感に着目した土屋の客観的分析方法は公共圏と呼びえる領域でナショナリズムへと接続されている。また物事が時空を超えて共感されることを具体的に示した。

3) 土屋の、若者の喪失感および悲しみの表現への着目と、インドネシアのよりよい未来への祈りがナショナリズムを越えさせ、2020年代以降の新たな共感の共同体への可能性を開いた。

4) 若者への注目が世代論の可能性を開いた。カルティニは若くして亡くなり、独立運動も若者が主役だった。初期のクロンチョン・1980年代の現在の音楽シーンも若者が主役であり、さらに土屋氏にとって「わが古き良きジョクジャカルタ時代」は若者であったときの思い出である<sup>3</sup>。翻って独立以降に公定ナショナリズムを住民に押し付ける主役は中高年男性なのかもしれない。

5) 喪失感への着目が分野横断への道を開いた。カルティニが持った喪失感、カルティニを失った世界、クロンチョン、エヴィートの歌詞に見られる喪失感などが、ノスタルジア、喪失が意味を求める傾向、パブリック・ヒストリーの実践における歴史との関係と接続し、文学はもとより心理学や歴史学とも交差している<sup>4</sup>。

6) こうして共感を重視し、これを的確に捉えたことによって土屋はナショナリズムを相対化して未来への開放性を確保し、2020年代の感情史的観点からはB. アンダーソンを大きく超えることになった。

次節では、以上の諸点を『カルティニの風景』の本文を検討しつつ示す。

### 3. 『カルティニの風景』本文の検討

#### 3.1 カルティニ書簡中の風景描写におけるノスタルジアからナショナリズムへ

本書は、はじめに土屋がカルティニを取り上げた経緯とカルティニの生涯と時代背景が述べられ、その後第4章にあたる「風景の誕生」と題した章で、ノスタルジアがナショナリズムに繋がる議論を展開するために、カルティニの風景描写が検討される。

風景描写は少ないが、ジャワ人が書いた風景としては画期的と言う。それはカルティニがオランダ語に堪能で、西洋の文法である「私」を獲得し、「私が

3 若者への注目に加えて、右翼思想への傾倒の起源についてクラブ活動をはじめとする中等教育時代の検討が必要である。

4 土屋自身の敬愛する人々の死、若さの喪失との関連性も検討する必要がある。

見る」という書き方ができるようになったこと、および神智学の影響を受けて、神の作った「美しい自然」・神への感謝という観念および美しい自然に関する決まり文句を得たことでもたらされた(土屋 1991:84-85)。以下の4例の引用中最初の2例は、カルティニが母と呼んだアベンダノン夫人宛である。夫のアベンダノンは当時、植民地政府教育文化省長官でありカルティニの擁護者であった。風景描写だけではなく、カルティニ自身も描写の中にあり、自然はカルティニの精神と交流するものとして描かれる。

夕方わたしはホンフレープ夫人とご一緒に海辺へまいりました。私は水浴びをしました。海は青く澄んで一様な色をたたえていました。わたしはそばの珊瑚礁に腰を下ろし、水の中に足を浸し、そしてはるか視界の尽きるまで眺め渡しました。まあ、なんて大地はすばらしく美しいんでしょう。歓喜と感謝の念と平和とが心にしみわたります。母なる自然Moether Natuurは、わたしどもが慰めを求めれば、それに取り合わずに行き過ぎてしまうことは決してありません(土屋 1991:82)。

思いにふけてわたしは外を眺めやり、青空を見つめます。まるでそこに、わたしの魂の中に吹きつっている疑問に対する答えを期待するかのよう。思わず知らず私の目は、大空を流れていく雲の群れを追っています。雲は、椰子の葉をふるわせたのちに流れ去ってゆきます。ふと、私の目は黄金色の日の光に映えてきらめきふるえている小さな葉にひきつけられます(土屋 1991:82)。

以下の例では神への感謝が主体で自然は抽象的に描かれている。

わたしどもが鳥の歌声という美しい交響曲を耳にして我を忘れる時に、神がわたしどもを耳が不自由なままで生んでくださらなかったことに感謝します。クレイン・スヘーフェニンゲンにあって、すべてが静謐で平和で詩的であり、また太陽がこの上なく美しく沈んでゆくその夢のような海辺を目の前にする時、わたしどもによく見える眼が授けられていることに対する感謝の念はいやまざるのです。そしてまた、みわたす限り天にまで至るさざなみに不思議なかぎやきと色紋とが広がるのを目にして、森羅万象(het Al)を形づくりこれを統べている不可視の偉大

な精神 (Onzienlijk Grooten Geest) への感謝の念がわきおこるのです (土屋 1991:87-88)。

土屋は一例目と三例目について、浜辺から帰ってきてすぐの時でも既に去ってしまった経験として書かれ、ノスタルジアをたたえたと述べる (土屋 1991:88)。この本の多くの読者には、ノスタルジアをたたえていることを何の説明もなしに感得することは無理であろう。しかし親しいヨーロッパ人女性宛てで、楽しかったあの時を強調して書くならば、懐かしさを伴う風景描写になることは理解できよう。さらに、カルティニにとって海へ行くことはいつでもできることでなく、通常は休みの日の朝にのみ許された楽しみであったのである (土屋 1991:87)。

カルティニの風景描写は、オランダ語の雑誌や文学における決まり文句であった可能性が複数の研究者によって指摘されている。そのため普遍的な風景を観念的に記すことになるが、そうだからこそ、誰のものでもあって誰のものでもない、多くの者が受け入れられる風景描写となったと土屋は論じる (89)。

以下の4例目に土屋は「喪失の風景」という小見出しをつけている。この長文の風景描写は、アベンダノン夫人宛て手紙の中にあるが、この手紙を書く一年前にカルティニは初めてアベンダノン夫人と会い一緒に浜辺へ行った。その思い出を記している。

私の目に再び見えてくるのは、白銀の月光に幻想的に輝いている、たとえようもなく美しいあの海辺です。月光は、たえずゆれ動く海面に、面の及ぶ限り、無限の反射光を投げかけております。それは金と銀の尽きることのないきらめきであります。

また、わたしの耳に再び聞こえてくるのは椰子の葉のふるえつぶやく音です。それは銀でできた大きな羽根のように、夕暮れのそよ風にゆれ動きます。わたしどもの頬をなで、耳にささやくようにして、そよ風は吹き過ぎてゆきます。

その葉音のつぶやきが、きらめく純白の浜辺に戯れるように砕けては散ってゆく、あのひかりかがやくやわらかな波の群れと、美しく一つに融け合ってゆきました。

それは夢、幸せな夢でした。そして、私どもは、銀の月光がきらめき、水面に金と銀とが流れ、星々が青い空にやさしくかがやき、椰子の葉のそよぎが銀色の光を投げかけ、そよ風が吹き、汀で波がやわらかに砕けているという、この月光に照らし出された海辺の幻想的な世界に取り囲まれて座っておりました。私どもは、はじめて

手にした高価な宝石とともにあって、静かな享楽とつりゆく歓喜の心で、心地よい旋律に耳を傾けて座っていました。その旋律は、はるかに遠い国々のおとぎ話、私どもの眼前に広がる海、金と銀とが果てることなくきらめいているその海のかなたのおとぎ話、海自身の神のような祖国のおとぎ話を語っておりました (土屋 1991:93-94)。

土屋は、「この文章が一種悲し気な色調を帯びているように思われる。」(土屋 1991:94)と書き、「2度と再び戻ってこない、そして求めても決して手にすることのできない世界へのノスタルジア。」(土屋 1991:103)をたたえているとする。その背景には、アベンダノン夫妻が助力したバタヴィアでの勉学の道が父親の反対によって閉ざされ、カルティニが心のよすがを失っていたことがあり、土屋はその喪失感と悲しみが現れていると述べる。

この「悲し気な色調」の主張については、カルティニの挫折を考慮してもなお、独断が過ぎると言われても仕方がないレベルにある。それまでの3例にあるような、カルティニの気持ちが表現されていず、とくにポジティブな気持ちに連なる感謝が不在であることは確かである。もし文中の「おとぎ話」がアベンダノン夫妻からもたらされたバタヴィアあるいはオランダでの勉学の話であったとしたら、この時カルティニはオランダ人高官に頼ったオランダでの勉学の実現を未だ諦めていなかったもので、夫人に悲し気に訴えて実現させようとした可能性もある<sup>5</sup>。いずれにせよ説得性を増すためにはこの手紙の前後にこれらの箇所を位置づける、あるいはカルティニ以外の事例を参照するなどの必要があろう。検索性IT機器、web上の史資料が存在せず、各種研究が進展していなかった1980年代は、独断を書きつけるしか方法がなかったとも言える<sup>6</sup>。

最後の例は「時代の風景」(第5章)と題される章の小見出し「ありうべきジャワの風景」の中で、自然描写のうちにジャワ対オランダがくっきりと映し出されている表現として、次の手紙文が引用される。

花と香り、この二つはわたしどもジャワ人のす

5 カルティニ研究者富永泰代のご教示による。

6 喪失の中で風景が輝く類似例が存在する。ホセリサルは処刑前(未来の喪失)に書いた詩の冒頭は祖国の美しさであった(アンダーソン 2007:234-235)。またシベリア抑留者の絶望状態にあつて「自己への関心がついに欠落する時、そのとき唐突に、自然はその人にかがやく。」事態が報告されている(石原 1974:37)。さらに心理学などの理論で補助できる可能性もある。

べてにとって、そしていつでも不可欠のもので  
す。

花の薫りと香の匂いをかぐたびごとに、それは私を思い出の世界、心に触れる世界へ導いてゆきます。それは過ぎ去った日々を思いださせ、私の身体に流れているジャワ人の血潮を強く感じさせます。ああ、民族の魂“ziel van mijn volk”その起源においてかくも美しく、気高く、詩的で、謙虚で、寛大であったその魂——あなたはいまだこへ行ってしまわれたのですか。過ぎ行く時と日常の繰り返し、あなたに何をもたらしてしまわれたのですか。

わたしどもの心は、ジャワ的であるよりもはるかにヨーロッパ的である、としばしばいわれます。それはなんとも心を沈ませる考えです。わたしどもは総身にヨーロッパ的な思考や感情が広がっているかもしれません。しかし、私どもの身体を流れ熱く息づいている血潮、ジャワ人の血潮は決して減らすことはできないのです。花と香り、ガメランの調べ、椰子に吹き渡る風のそよぎ、ジャワ鳩の鳴き声、稲穂の波、米臼の音、これらに触れる時に、私どもはそのジャワの血を感ずるのです。(土屋 1991:136-137)

この引用の後に土屋は次のように書く。カルティニの綴る風景描写がナショナリズムに繋がる重要な部分であるので、長文であるが引用する。

カルティニは、このように「美しい章句」、「紋切り型の決まり文句」によって表現できる風景、これこそが<ジャワ>の風景であり、時代を越えて受け継がれて来た<ジャワの血潮>であることを明言するのである。それだけでなく、そこに見られるのは、それこそ将来にわたって受け継がれていくべき<ジャワの血潮>であるという、カルティニの決意と祈りである。それはあの夜の海辺の光景が現実の風景である以上に「夢」に帰属し、いまひとたび手元へたぐりよせたいと渴望する風景であったのと同じように、それによってジャワ人の血潮がかきたれられるような、<ありうべき風景>なのである。しかも、重要なことは、この<ありうべき風景>が、ノスタルジアと喪失感をその裏側にはりつけていることである。花の薫りが過ぎ去った日々を思い出させることを記し、「わが民族の魂」に触れて、「あなたは今どこへ行ってしまったのですか」と嘆く時、それは、ひとりカルティニの絶唱のみならず、実は、やがてきたるべきナショナリ

ズムの基調音としてなり響くものであった。「ありうべき風景」とは、未来にあって希求すべき風景であるとともに、すでに喪失されたがゆえにノスタルジアとしてある風景でもある。今ではすでに失われてしまったけれども、「美しく気高い過去」がかつて確かに存在していた。そのことを想起し、さらにそれを回復しようとする時、「過去」はただちに「未来」と結びつき、逆に「未来」と「過去」とは手を携える。それがやがてナショナリズムの原動力の一つとなっていくのである(土屋 1991:137-138)。

(中略)

つまり、このようにして風景が輪郭と名称を得て、その帰属先が他のどこでもない「ジャワ」であると規定されること、そのことは、風景に文化的な意味が与えられ、その文化的な意味付けによって、風景が自他を弁別する源泉と化することにほかならない。カルティニがインドネシア民族主義の先駆者であるという事柄の核心は、実に、このような彼女の自覚とじかにかかわっているであろう。なぜならば、ひとたびこのような自覚が表明されてそれが共有されるようになることこそ、近代のナショナリズムの要諦だからである。そしてこの理念は「クリシェ」として初めて共有されていくのである(土屋 1991:138-139)。

カルティニの手紙の最後の例もまた、これを自然描写と言えるかなど、3例目と同じように別の読み方が可能である。しかし上に引用した土屋の思考は、もはやカルティニの文章をも置き去りにして、風景のジャワへの帰属、そしてナショナリズムへと疾走する。そのスピードとリズムはスカルノの演説を連想させさえる。土屋は自らの感情から生まれる思考の流れを定着させることを読者の理解に優先させている。この本の他の部分でも同様の傾向がみられ、史料を吟味したり、学説を検討することは少ない。カルティニの風景描写がナショナリズムへ連なる議論は、入口と出口が抑えられていて卓抜な着想・発見であるが、根拠史料が少なく中間がブラックボックスとなっている。このような場合にはスピードと名調子がなければ、説明はなりたないであろう。しかし問題も残る。インドネシア近代史を専門とした筆者にとっても準備と思索がなければ理解が簡単ではない本書を、どれだけの数の人が理解できるであろうか。

とはいえ、今世紀の心理学や脳科学の発達で、これらの学問の理論や仮説が土屋の議論を援護する可

能性が広がって来た。既に土屋は、ノスタルジアの体験が生じる必要条件は「良い過去・悪い現在」という明らかな対称が成り立つこと、現在もしくは差し迫った状況に対するなんらかの否定的な感情を背景にして、生きられた過去を肯定的な響きでもって呼び起こすことという心理学の議論（デーヴィス 1990）を知っていたと思われるが、さらに最近では、喪失が意味を求める傾向を持つことが研究されている。

なおノスタルジア・共感に関して、本章以降は平易な叙述が続く。

### 3.2 カルティニ書簡集とカルティニの願いへの共感

第6章に相当する「風景の行方」（土屋 1991:145-180）ではカルティニ書簡集の出版を出発点とした時空を超える感動・共感の拡大が具体的に描かれる。

1911年にオランダ本国でアベンダノンの編集になるカルティニ書簡集が出版されるとベストセラーとなった。「第一刷は数か月のうちに売り切れ、同じように第2刷も売り切れ、1912年末までに第3刷が発行された」（土屋 1991:150）、1923年に第4版、1976年に第5版が出ている。オランダ在住のインドネシア人留学生にも深い感銘を与えたという（土屋 1991:174）。書簡集の翻訳は23年版のアベンダノンの解説によれば、すでにマレー語のほか、ジャワ語、スンダ語、マドゥラ語、バリ語などのインドネシア各地方語に訳されたほか、英語、アラビア語、フランス語、スペイン語、ロシア語で翻訳されたと言う。カルティニの評伝は、インドネシア独立後に多く書かれ中でもプラムディヤ、シテイスマンガリ・スロトのものが有名である。さらにカルティニ書簡集はその売り上げを、オランダ領東インドの女子教育のための「カルティニ学校」を建てる目的で出版されたため、女子教育が注目され多くの寄付が集まった。そしてバタヴィア、メーステル・コルネリス、ポゴール、マディウン、マラン、プカロンガン、チレボン、インドラマユなどに学校が建設されていった。カルティニとその書簡集は国際的なエリートの間で共感呼んだ。これはオランダでオランダ語の初版が出版されたことにある。オランダ領東インドでの共感は、まず女子教育の分野でひろまり、その後ナショナリズムに取り込まれたと言えよう。

こうしてカルティニは時空を超えてそれぞれの土地・時代で選り取られたが、意義・感動の側面は各地域でそれぞれであったと言える<sup>7</sup>。

### 3.3 クロンチョン音楽への共感の広がり：

#### 誰が歌い、誰が聞くか

「クロンチョン音楽の旅」（第7章）ではこの音楽が、カルティニと異なり、ジャワ中心に面的に広がることを示す。

バタヴィアの東の郊外にトゥグーという集落があった。ポルトガル系の住民が居住し、見たことのない故郷ポルトガルの文化を伝えていた。クロンチョンの起源はポルトガルで歌われていた「船曳唄」や「子守唄」であったという。19世紀後半にトゥグーからバタヴィアへ道路が通じ、クロンチョンはバタヴィアにもたらされて人々の心を捉えた。まずユーラシアンの青年、ついで華人・バタヴィアの若者たちに受け入れられた。ユーラシアン・プラナカンは両属性、無所属性、偏在性を有する者達であるとともに、差別を受けやすく裕福ではなかったであろう。彼らはクロンチョンを流して歩き、たいそういなせで良家の子女を惑わす不良の輩と見なされた。クロンチョンは、19世紀末までにはバタヴィアにしっかり根を下ろしたものと考えられ、人気を博してバタヴィア以外にも伝播していった。

一方、ユーラシアン・華人を主体とする大衆劇コメディ・スタンブルが出現してクロンチョン音楽を使用し、1891年からはこの大衆劇の劇団がバタヴィアなどの大都市に設立された。そこからクロンチョンの人気歌手が誕生し、楽団、観客にインドネシア人が増えるにしたがって、クロンチョンにもインドネシア的曲が増えた。ただしクロンチョン音楽のうち半数以上がいつどこで誰が作曲したのか全く不明であった。

クロンチョンは聴衆が身銭を切ることで支えられてきた。そこで観衆の目を開かせ、耳を傾けさせ、ひと時苦しい日常を忘れてもらう必要があった。非日常の男女の愛や恋、月光や夜の海、いまだ見えない世界、かつてありし世界が歌われ、人気＝共感を獲得していったのである。

1925年にラジオ放送が始まるとクロンチョンの番組が生まれ、人々に口ずさまれるようになった。当時書かれた小説にもクロンチョンを口ずさむ人の姿が描かれるようになる。そしてナショナリズムがクロンチョンを受け入れ祖国インドネシアのものとの認識が広まった。

クロンチョンは、カルティニ書簡集および風景画と異なり、優れて民衆のものであり、市場を介した消費によって支えられてきたと言える。

7 オランダ生まれのパチャ・メスキータ著『文化はいかに情動をつくるのか——人と人のあいだの心理学』（高橋洋（訳）、2024、紀伊國屋書店）は心理学の観点からこの問題を論じ

ている。

### 3.4 独立後の公定ナショナリズムと1980年代の若者の歌

クロンチオン音楽に続いて、第8章にあたる「うるわしの東インドの旅」では植民地期の風景画の展開が説明される。その後最終章の「うるわしのインドネシア」では、インドネシア中央政府の政策による「うるわしのインドネシア」が公定ナショナリズム拡大の一環として宣伝されていく様子が描かれ、最後に、公定ナショナリズムとは異なる心象風景を歌う若手歌手エヴィートの「友への便り」の心象風景と聴衆の共感が語られて終わる。

#### 友への便り

友よ、旅の便りを届けます  
この旅はかなしみにとざされた旅でした  
君とは一緒に来れなかったけれども  
この石ころだらけの旅路では  
多くの物語と出会うことになりました  
草のしおれ、石くれの鈍く光る荒れ野に  
泣きじゃくりながら牛を追う子供がいました  
どうしたのと聞くと、父も母も遠い昔に居なくなり  
ました、天変地異に飲み込まれてしまった  
のですと答えるばかりです  
このくにはどうしてこんなにもわざわいが多い  
のだろうか  
そのことを海に問い山に問い空に問うても  
森閑として答も返ってきません  
それは、神がわれらの所業を厭っておられること  
のしるしなのでしょう  
それとも、自然がわれわれを疎み友とすることを嫌  
っていることなのでしょう  
友よ、風にゆれる草の葉に向かって  
どうかそのことを、尋ねてみてください（土屋  
1991:263-264）

土屋は本書で自らが辿って来た「うるわしのインドネシア」に唯一の価値を与えてはいない。「『友への便り』に限らず、エヴィートの数々の歌を通して映し出される風景は、光と色彩に満ちた常のインドネシアのイメージ『うるわしのインドネシア』とは、また別の世界を伝えている。」（土屋 1991:266）と述べ、中高年と若者の反応を次のように対比する。

その当時、エヴィートのメッセージが熱く迎え入れられていることについて、これは、主情への退行であってめめしいことだとなげく声や、抵抗の歌であるとして嫌悪の情を示す人々もあっ

た。だが、「友への便り」に耳を傾ける若者たちは、このひき語りのリリズムにいつとき心を洗われ、そのことによって、彼らの生きていける社会に対してシニシズムに陥っていくことをきわどく阻止し、この社会にあらためて希望を繋ぎとめようとしているように、私には思われた（土屋 1991:267）。

土屋は開発独裁下のインドネシアの経済的繁栄を肯定的に見ることができなかった<sup>8</sup>。本章冒頭の池端への手紙の中にある「しみじみ思う」はノスタルジアの言い替えの言葉でもあり、「ひととひとが心を通い合やすことができ、明日が今日よりも良くなることを信じ、勝つために闘うのではなく（場合によっては敗れることが解っていても）自分を越える価値のために闘う」ことが、インドネシアにかつてありも無いものであることが示されている。土屋は押川典昭をはじめとする何人かの人々に、インドネシアに対する幻滅を語った。筆者もまた土屋から直接聞いたことがある。このノスタルジアが土屋の目を異なった未来に向けさせたと推測される。

### 3.5 未来の開放

土屋は未来について若者に期待していた。25歳で亡くなったカルティニ、初期クロンチオンを広めたユーラシアン若者、ナショナリズム運動の草創期、エヴィートらはほとんどすべて若者であった。そして風景の変遷における未来に、次のように思いを馳せる。

カルティニ以来の自己表現の伝統につながりそれをリフレインしながら、いま目にしている時代の風景を描きあげる人々が、この先、次から次へと、インドネシアの地平線の上に姿を現してくるのであろうか（土屋 1991:268）。

「風景」はなお道半ば、これからさらに旅を続けるだろう。それはどのような旅となるのであろうか。次の世紀にその形を作り上げてその行方をまず見届けるべきは、もちろん、インドネシアの次の世代である。その時、日本の次の世代も、

8 遺稿「負けないぞ」（土屋 1995）は、1977年に23歳だったユディステイラの文学の検討であり、この小説がカルティニおよび19世紀の伝統を背景とすることを指摘している。しかしカルティニ、風景画、クロンチオンがナショナリズムへ接続されるような未来への回転はないままであった。そしてユディステイラの小説で開発下の物質的繁栄を享受しながら既存の価値を破壊する少年を描く『アルジュナは愛を求めろ』には言及がなかった。

自らのところをアジアに向かって解き放つことになるのであろうか（土屋 1991:269）。

このような若者の新たな表現が風景を作る、すなわち未来を創ることへの土屋の期待がナショナリズムを越えさせる。『カルティニの風景』の最終章と「あとがき」は、ナショナリズムなど盛衰や終わりのある概念・事物を主役とすることによる拘束から、未来を開放することに成功している。未来はフロンティアとなる。開発独裁下での物質的繁栄を眼前にして、古き良きジャワへの喪失感を覚えた土屋が、カルティニにひそみ、ありうべき風景を次世代の若者に託したのかもしれない。

このことはさらに、革命的とでも言える思考へ繋がった。国軍＝中高年男性が最上位の世の中に未来を創る主役として若者・女性・弱者をより上位に配したのである。公定ナショナリズムに対して下方に押しやられ覆い隠されるものを主体としたことになるが、この姿勢は21世紀の社会状況・社会課題と研究に繋がる<sup>9</sup>。

## 4. 2020年代に繋がる『カルティニの風景』

### 4.1 「共感の共同体」の形成とその媒体：

#### 時間軸の開放性

「共感の共同体」はある事物に関して共同体内で同じ感情が抱かれることを指す感情史の用語である。この用語を念頭に、『カルティニの風景』に示される事物について共感を持つ人の広がりや、媒体と受け手に注目して時系列で整理すると、次のようである。

出版：ニヤイ物語（マレー文学） 読者 主に都市の住人

出版：カルティニ書簡集（オランダ語） 読者 初期はオランダと蘭印のエリート層

流し：クロンチョン バタビアの民衆

劇場：コメディ・スタンブル（バックミュージックはクロンチョン） 都市の住人

ラジオ：1925年ラジオ番組クロンチョン 市井の人々、都市以外にも広がりを持つ。

（映画・レコードは記述無し）

（TV：公定ナショナリズムの媒体 一文のみ 254頁）

ラジカセ・民間放送局の林立：ダンドット、ジャイ

9 タマンシスワから土屋を移行させたものは何か。土屋の感じるノスタルジア（はじめの混沌としたアルモフなしかし一種前に進む希望に満ちた時代が過去のものとなってしまっているインドネシア）とともに、本人の喪失体験（1987年母親、87年永積昭の死）も影響を与えた可能性がある。

ポンガン等 都市、町、村落 外島へ

以上、媒体の発達によって受け手が拡大してゆくことが解る。しかもこれらの事物は市場を介した消費によって支えられており、共感が拡大することを説得的に示している。

『カルティニの風景』以降の世界については、共感をキー概念とはしないものの、独立後から2020年代までのポピュラー音楽の展開を金（2023）が辿っており、若者が主役級の発信者であることが解る。土屋と金の分析では史資料の制約があり、共感する者の拡大は解るものの「共感の共同体」の狭義の意味である共通の了解が形成されるか否かはわからない。しかし21世紀に入ってからネット配信・SNSによって共通の了解の形成を追うことが技術的に可能になってきた。土屋の分析に無理なく繋げることができ、かつ研究の意義がある。土屋の研究に直接接続させるためには、風景、喪失感、ノスタルジア、未来をどうとらえるかなどの確認が必要であろう。一方、日本・韓国・中国・インドのポップカルチャーとの関わりにも注意する必要がある<sup>10</sup>。

### 4.2 感情史・感情とパブリック・ヒストリーとの繋がり

喪失の経験から生じるノスタルジア（過去への感情）が、過去を再定義し未来に回復すべきものと認識されるナショナリズムに繋がることは土屋が起した議論であるが、この前半部分が2020年代の日本の若者にも起きている。

Anna Clarkは人々が「過去」について問い始めるきっかけとして「死」に直面した時、「老い」に直面した時、「喪失」を経験した時であり、ライフイベントと人々の「過去」に対する意識との間には関係性があるとする。しかしパブリック・ヒストリーの実践の現場である高校の日本史の授業から、ライフイベントと言えない「喪失」の経験からも「過去」と現在に対する意識の変化が見られた事例が報告された（徳原 2024）。ある不登校気味の高校生が（差別、排除によって）「自分の居場所がここじゃないって感覚がずっとあって」（感情）、「先生の授業は感情を扱うから出席している。」とっていたが、祖父との交流から歴史への問い・関心が生まれた。さらに同じ痛みを持つ級友との会話で過去に関する感情表現がそのまま受け入れられると、過去・現在の社会との接続のし直しが起きた。この事例を報告した高校教

10 筆者は2024年1月に30年ぶりにダンドットをユーチューブで見て、AKB48などの日本のグループに似ていたので驚いた。

論は、この過程に教諭の役割は少なく家族や級友の役割が大であったこと、そして歴史の授業によって、先生も生徒も皆が緊張や抑圧から解放され、皆がケアされるよう願うことを述べた。

感情とパブリック・ヒストリーの繋がりは教室に留まらない<sup>11</sup>。感情史を専門としている森田は言う。

歴史学の未来を開いていくためには一般の、ともすれば素朴な歴史への関心を取り込んでいく必要がある、その意味ではいわゆる「パブリック・ヒストリー」も重要になると思うんです。(中略)アカデミックな歴史学の外で行われる歴史実践を総称してパブリック・ヒストリーと言いますが、大学で歴史学を研究している人たちがそういうものを「自分たちとは違う」と言って切り離してしまうのはダメなのではないか。(中略)感情という視点の間口の広さには可能性があるのではないのでしょうか(森田 2023:20)。

本章冒頭の二番目の引用および森田の発言にあるように感情史は分野横断の可能性を持っているが、『カルティニの風景』はノスタルジアと共感によって文学、音楽史、絵画史、政治思想史などの具体的分野横断の事例を示す。日本では人口減少によって人文学はダウンサイジングを余儀なくされること、AIでは補えない個人の処理能力の限界から研究の質量が右肩上がりにはありえないことを考える時、分野横断を可能とするコンセプトの発見は極めて重要である。

## 5. 土屋健治が抱える 20 世紀的制約

『カルティニの風景』で土屋は若者への着目と未来への希求によって時間軸における顕著な開放性を獲得したが、空間的開放性は弱い。土屋の努力は、ナショナリズムの誕生にむけてジャワとオランダを峻別することに注がれた結果、記述は本人が魅了されたジャワと宗主国のオランダに集中する。特に外島に関する言及は少ないが、外島はカルティニの時代および1970・80年代には経済のフロンティアであった。

空間の開放性について考察対象が、おそらく史資料の制約によって、風景描写と風景画に偏ったこと

が説得性を弱めた可能性もある<sup>12</sup>。土屋は誰のものでもないがゆえに誰のものでもある風景がジャワへ帰属し、時間性と空間性を脱したとする。しかし語られる風景は、カルティニの居住地、旅行先、カルティニ書簡中に挿入された風景の挿絵とその風景描写、そして特徴が一括して抽象的に語られる風景画であり、ジャワへ偏った印象がある。たとえば、カルティニが「稲穂の波、米臼の音」(土屋 1991:137)と書く時、外島で主食がコメでない地域の人々はどうに感じるだろうか。

このジャワへの偏向のある風景がその他の地方に受け入れられる状況は次のように書かれる。1938年初訳のインドネシア語版カルティニ書簡集中の挿絵は西ジャワの田園風景であり、翻訳者(インドネシア人)はジャワ語文化圏ではない西部ジャワと中部ジャワを区別していない。土屋もまた同様であり、書簡集の湛えるノスタルジアの雰囲気を見事に伝えているとしている。言葉を変えていうと編集者・翻訳者の感情や観念が散布されることになる(土屋 1991:80-81)。「絵画は(音楽も同じであるが)言語圏が変わっても翻訳する必要がなく、言語のバリエーションがない分だけ、その拡散は早く容易である。こうして、言語と文化を異にする様々な人々がこの様式の絵画を描き、また購入していった。」(土屋 1991:118-119)のである。

さらにジャワの風景・風景画をジャワにきた外島のナショナリストが祖国インドネシアの風景として観念的に受け入れるとする。事例として西スマトラ出身のヤミンの詩が、当初は西スマトラの美しい風景を讃えていたものが、政治活動の過程で美しい祖国インドネシアを讃えるようになったことを示す(土屋 1991:221-223)。このことは、ナショナリズムが優れて観念の産物であり、受容される具体的地方の生態・生活文化を無視していることを示す。土屋の言うインドネシア文化は外島においては何時、どの地域まで、どの層まで広がったかを考えるとき、かなり限定的であったと言わざるを得ない。なかでも風景画の所有は植民地期はエリート、その後もある程度富裕な者に限られていただろう。2020年代から見れば、なぜかともジャワに集中してよかったのか。史資料の制約を考慮してもなお疑問が残る。

そこには20世紀後半の時代的制約である土屋のエリート性が垣間見える。クロンチョンを除いて、『カルティニの風景』が専論する事物の発信者・受容者はエリート・いくらかの金持ちであり、絵画は書き

11 たとえば、アメリカで一般の人々によるファミリーヒストリーが盛んであるが、親密な他者の話(「個人的経験」と「紐帯」)が「過去との接続性」を人々にもたらす重要な契機となっていると言う。また研究者がパブリック・ヒストリーにおいて一般の人に活動を理解して受け入れてもらうためには感情、立ち位置の工夫が必要である(西村 2019:177-180,188-189)。

12 クロンチョン音楽の空間的広がりも言及されるが、地名がないために無理に広がり強調しているかの感がある(土屋 1991:125; 196-197)。

手も所収者も若者主体ではない。共感の広がりも思想・歌詞の製作者・編集者、広めるメディアのことが中心的に書かれている。史資料の発掘が難しい受け手についても説得的に書かれているものの、主役は作り手である。民衆から見上げる視線はとられず、対話的姿勢も欠如している。土屋にとって関心事であるエヴィートの歌への若者の熱狂も、エヴィートのコンサートでは周囲の人と会話をせず、観察されたもの、観察から引き出された土屋の思考が記された。土屋が直接質問するのは、インドネシア大学で土屋の講義を受講する学生、すなわち上下関係のある者のみであった。

また『カルティニの風景』は、読者にとって、とくにインドネシア近代史を知らないものにとって読みやすいものではない。自らの感情に裏付けられた意識の流れを重視し、頻繁に読者を置き去りにする。参考文献その他を援用して土屋の意識や感情を少しづつ辿りながら理解すると、初めてその卓越性が解る。別言すれば感情は環境の変化に刺激されて起こるので優れて環境依存的であり、偶然同じような体験を持つか、事物が生起した環境の知識がなければ、理解不可能である<sup>13</sup>。

以上の、若者革命を心のうちに宿しつつもなお残る、土屋のエリート性・上からの押し付けに見える態度、そして2020年代から見るならば空間の開放性の弱さは、土屋の個性ではなく、20世紀後半のインドネシア地域研究の学術的姿勢、そして現実の政治経済・科学技術の発達状況という時代的制約を背景としていたと思われる<sup>14</sup>。

インドネシアにかかわる国家論・権力論を概観すると、著名なものは20世紀後半に集中する。これらは国家の内部を考察対象とし、地域的にはジャワ・バリに集中する。なお国家論（権力論）の対象が国家の内部であることは欧米で語られる権力論と同様である。C. ギアツの王権論である『ヌガラ』はバリを事例とする劇場国家論として高い評価を受けたが、現実の国家の外にあるオランダ植民地政庁・華人の活動・貿易動向の影響には触れない（ギアツ 1990）。

さらに歴史的展開もほぼない。B. アンダーソンと土屋健治がそれぞれ論じるジャワの権力概念も同様である（アンダーソン 1995; 土屋 1982）。両者とも権力の中心からトップダウンで画一的に語られる。具体的時間空間がなく、ジャワでは未来永劫万人がそのように観念しているような印象を受ける。これに対して白石隆の官僚制国家論は具体的であり歴史性を有するが、中央であるジャカルタから地方への言及はジャワ中心かつ画一的である（白石 2000）。

この研究動向は、おそらく20世紀後半における中央政府から地方勢力への抽象的非歴史的観念の散布、すなわち、誰のものでもないで誰のものでもあり、受容されやすい観念（たとえばパンチャシラ、開発など）を中央政府が地方統治に多用していたことが背景にあると考えられる。中央政府は、植民地支配の遺産である巨大官僚組織を活用し/せざるを得ず、開発援助を国家プロジェクトとして実装する。地方の支配層・有力者は国軍の軍勢力の下に開発プロジェクトで資金供与を受け、地方の各層は翻訳的適応を示す（白石 1996）。こうして文化が統一されていなくても、ナショナリズムが充分浸透しなくても「バラバラで一緒」（立本成文）の統合が成立し、抽象的非歴史的観念は流行が変わると新たにまた作り出される。20世紀の中央と地方についての関係は今後詳しく検討する予定である。

以上のような20世紀後半の相対化は、21世紀に入って展開してきた民衆の思考世界の研究と対比して明らかになった側面がある<sup>15</sup>。土屋の述べるように中央集権の国家システム・軍による公定ナショナリズムの民衆への押しつけは存在した。しかし土屋が『カルティニの風景』の最後の部分で述べるように、市井の人の国民意識・感情は別の存在であり、簡単に刷り込まれない人々がいた。国民個人の側から見ると歴史観・アイデンティティに重層性があり、ナショナル・アイデンティティはいくつかあるもののひとつであり、重要度は各人が異にする。おそらくTPOでも変化するのであろう。

こうしてみると土屋は、カルティニのように過渡期に生きた研究者かもしれない。試みにB. アンダーソンと比較するならば、感情・共感を核とした土屋の21世紀における優位性が明らかとなる。たとえば『想像の共同体』は言葉・理性に集中し、特に使用された言語が何語であるかを重視して、感情について

13 たとえば筆者は2代目浜っ子（横浜生まれ）であり、田舎を持たない。メスティン文化、異国の文物へのあこがれ、ユーラシアン若者の寄り添い、彼らがいなせであると言うのは非常に共感できるが、さりとて土屋の描く情景と同じかどうかは心もとない。

14 土屋は日本においてヨーロッパ的枠組を押し付けられ、鬱屈していたようである。インドネシア留学から帰国後、絶えることなくクロンチョン音楽を聴いていたというが、この音楽を聴くと頭の上に押し付けられている何かが天蓋が開くように軽くなると、手ぶりを交えて語ってくれたことが、筆者の記憶にある。

15 事例として次が挙げられる。土屋喜生. 2024. 「歴史認識論争と草の根の歴史観〈ダバオ滞在記2〉」『CSEAS ニューズレター』82 (<https://newsletter.cseas.kyoto-u.ac.jp/nl-82/tsuchiya-4/>, 閲覧日: 2025年2月21日). 今福龍太. 2024. 「現在の歴史」を生きる」朝日新聞. 2024年11月1日. 11面.

の議論はほとんどない。国歌斉唱が無私の状況を作り出すとして（アンダーソン 2007:232-233）、「ただ言語だけがとりわけ詩歌の形式において一示する特殊な同時存在的な共同性がある。」（アンダーソン 2007:238）のであろうか。アンダーソンはナショナリズムが言語によって想像された共同体の一種の形態であると捉え、さらに人々が国民に対して特別な愛着の感情を持つ根本的な理由として、国民という言葉には自己犠牲を伴う愛情を喚起すると説明している。これ以上の具体的説明はない。『カルティニの風景』を前にすると、ほんとうに愛国の感情はそのような形でしか喚起されないのであろうか、との疑問が沸く。さらに AI 技術の進展によって言語の違いが障壁になる度合いが絶対のものではなくなってきている現在、アンダーソンの言語（国語）への固執が奇異に思われる。

『想像の共同体』はロゴスによる見事な腑分けと曖昧さを許さない概念によって 2020 年代においてもブリアリアントな広域の議論が展開されている。しかしその一方で、各国の比較に重点を置いたために、国内において視線は国家の中心から発せられ、主体もエリート中心である。ジェンダーを考慮した場合、男性主体の可能性が大である。そして市井の人の意識・感情のレベルへの言及は少ない。ナショナリズムの展開の限定性が伺われる。

## 6. おわりに

最後に『カルティニの風景』で、インドネシアのこころのありようを把握するために使用された方法を中心に、土屋健治論への足掛かりを得たい。

第一に、土屋は、ノスタルジアが未来（ナショナリズム）への原動力となるという卓見と、それを、風景を中心とする具体例で繋げる力技をなした。ノスタルジアという感情と共感を核に、高谷同様、自分の体験から研究を開始して個別の事象間の関連を発見した。バラバラなピースが一つの像となったわけだが、このような才能は、生来の資質に加えて、いっどこでどのような知識、体験から得たのであろうか。

第二に、土屋によれば、若者は未来の風景の創造者で期待すべき存在であり、他方、公定の「うるわしのインドネシア」を上から民衆に押し付ける主体は、中高年、おそらく男性である。既存の価値の転換であり、土屋の意識中の若者革命とも言える。またこの思考は中央中心史観・進歩史観から逃れられない近代的枠組や観念で現在や未来を拘束しない。感情（ノスタルジア）・共感に優れて環境依存的であり、

環境変化が現場感覚の変化を生み、さらに意識の変化、価値観の変化を促す。この側面で土屋の思考はナショナリズム、および B. アンダーソンの議論を越える。土屋はどのようにしてこの思考を手に入れたのだろうか。

第三に、『カルティニの風景』は、環境の悪化で既存の価値観が崩れ精神的危機にあるときの対処法の一つを提示している。単純だが具体的な過去・現在・未来の接続のしなおいし、周囲の人々との接続のしなおいしを提示しており、その意味で救いの物語となっている。この点でパブリック・ヒストリーの実践との交差がみられる。このほか様々な学問分野との分野横断性がみられるが、分野横断性は何によって生まれるのであろうか。

第四に、土屋にない発想は、21 世紀に研究され始めた民衆のアイデンティティのありかただと言える。民衆にとってナショナリズムはいくつか持つアイデンティティのうちの一つである。この点で、土屋はなおナショナリズムに縛られていたと言えようか。1990 年の東南アジアを概観するにあたり国家を中心に論じたあとで「ここでは、時代はいまなおナショナリズムの時代である。」（土屋 1991:271）と述べて終わる。

第五に、土屋は『カルティニの風景』において、自らの意識、思考の流れを滞らせないように書きつけることを最優先した。自らのノスタルジアをよすがに分野横断的、かつ公共圏も親密圏も区別しない思考の疾走である。この読者を置き去りにする思考の疾走は、高谷、そして桜井の『東南アジア世界の形成』にも通じるものがあり、既存のアカデミズムの枠内に入らないとしても作品として未来に開かれたものである。この疾走の原動力は学生時代にインドネシアに留学し、滞在したジョクジャカルタにおける至高のジャワ体験であろう。土屋は終生、この体験をよりどころにインドネシアを描いていた。魅せられた理由、経緯、終生変わらなかった（無反省であった）理由を探る必要がある。

その一方で、2020 年代という価値の転換期で次の文化の模索が必要な時には、いくつもの具体的事象の繋がりを発見するために、学問分野の境界線の下に広がる深い水脈に向けて、時代感覚、知識・体験を携えて潜水する、土屋、高谷、桜井のようなファースト・ペンギンが何人も必要である。潜水して感情と言うキーを得た土屋のような若者が近い将来に出ること、それが学問分野の根源的な再編につながることで、また若者の周囲には土屋のように若者を暖かく見守る先輩たちがいることを祈りたい。

土屋はカルティニと同様に過渡期あるいは狭間の

人であったのかもしれない。第三章は期せずして、土屋のノスタルジアが未来へ繋がる点で、土屋の議論を援護していることになった。このワーキングペーパー脱稿予定日の2024年2月27日が30回忌となる土屋が見たら、このワーキングペーパー全体がノスタルジアを湛えていると言うだろうか。

#### 参考文献

- アンダーソン, B. 中島成久 (訳). 1995. 『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求』日本エディタースクール出版部.
- アンダーソン, B. 白石隆・白石さや (訳). 2007. 『定本 想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.
- 池端雪浦. 1993. 「書評 土屋健治著『カルティニの風景』」『アジア研究』40 (1). 153-164 頁.
- 石原吉郎. 1974. 『海を流れる河』花神社.
- 小野寺拓也・森田直子. 2023. 「感情がひらく越境と革新の可能性」『現代思想』51 (15). 8-21 頁.
- 金悠進. 2023. 『ポピュラー音楽と現代政治: インドネシア自立と依存の文化実践』京都大学学術出版会.
- ギアツ, クリフォード. 小泉潤二 (訳). 1990. 『ヌガラ: 19世紀バリの劇場国家』みすず書房.
- 白石隆. 2000. 『海の帝国: アジアをどう考えるか (中公新書1551)』中央公論新社.
- 白石隆. 1996. 『新版インドネシア』エヌティティ出版.
- 土屋健治. 1982. 『インドネシア民族主義の研究——タマン・シスワの成立と展開』創文社.
- 土屋健治. 1991. 『カルティニの風景』めこん.
- 土屋健治. 1995. 「ユディスティラ「負けないぞ」—トラウマの文学を論ずる」『人文学報』75. 151-178 頁.
- デーヴィス, F. 間場寿一ほか (訳). 1990. 『ノスタルジアの社会学』世界思想社.
- 徳原拓也. 2024. 「パブリック・ヒストリーと教室空間」大阪大学歴史教育研究会第161回例会報告 (2024年10月19日).
- 西村明. 2019. 「いまに生きる、いまに生かす歴史的空間における歴史実践—「Oターン郷土誌家」を目指して」菅豊・北條勝貴 (編) 『パブリック・ヒストリー入門: 開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版. 176-193 頁.
- メスキータ, バチャ (著). 高橋洋 (訳) 2004. 『文化はいかに情動をつくるのか——人と人のあいだの心理学文化はいかに情動を作るのか 人と人の間の心理学』紀伊國屋書店.
- 森田直子. 2016. 「感情史を考える (研究動向)」『史學雑誌』125 (3). 39-57 頁.
- 森田直子. 2020. 「歴史学は感情をどう扱うのか——罵りをめぐる感情史の一試論——」『エモーション・スタディーズ』5 (1). 45-55 頁.
- 山本圭. 2023. 「公共と情念: いつか来る感情政治学のためのノート」『現代思想』51 (15). 157-160 頁.
- ユディスティラ ANM マサルディ. 押川典昭 (訳). 1993. 『アルジュナは愛をもとめる』メコン.
- ローゼンワイン, B. H.・R. クリステリアーニ (著). 伊東剛史ほか (訳). 2021. 『感情史とは何か』岩波書店.
- 『土屋健治追悼集』刊行会編. 1996. 『時間の束をひもといて: 追悼土屋健治』『土屋健治追悼集』刊行会.

GCR Working Paper Series No.8

2020年代を照らす1980年代東南アジア研究センター  
の作品 物故者編：高谷好一、桜井由躬雄、土屋健  
治の尖鋭性

著 者：大橋厚子

発 行 日：令和7年3月

制作・発行：京都大学東南アジア地域研究研究所  
共同利用・共同研究拠点「グローバル共生に向け  
た東南アジア地域研究の国際共同研究拠点（GCR）」  
<https://gcr.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

印 刷：株式会社田中プリント  
〒600-8047 京都府京都市下京区石不動之町 677-2  
<http://www.tn-p.co.jp>





